

覚園寺裏山やぐらに関する研究
— 『百八やぐら調査報告書』を資料として —

Research on the Yagura tombs of the hill behind Kakuon-ji temple:
investigation reports as a sample of the Hyakuhachi Yagura tombs survey reports

星野 玲子

Reiko HOSHINO

「鶴見大学紀要」第49号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成24年 3 月）別刷

覚園寺裏山やぐらに関する研究

—『百八やぐら調査報告書』を資料として—

Research on the Yagura tombs of the hill behind Kakuon-ji temple:
investigation reports as a sample of the Hyakuhachi Yagura tombs survey reports

星野 玲子

Reiko HOSHINO

1. はじめに

神奈川県鎌倉市及び三浦半島・房総半島地域に、「やぐら」と呼ばれる岩盤を削り貫いた横穴状の遺構がある。やぐらは納骨の場と供養の場という役割を担っていて、13世紀～15世紀頃に盛んに構築された。現在、様々な事情によりその正確な数は把握されていないが、鎌倉市内だけでも1000基を超えることは間違いないだろう。岩盤に穿たれた方形の横穴状遺構は、日本国内において各地に存在するが、ここでいう「やぐら」の分布範囲は、鎌倉市を密集地として北は横浜市の本牧、南は三浦半島、東は千葉県の房総半島、西は平塚周辺¹⁾、或いは伊豆半島にまで伸ばして考えることもある²⁾。この関東南部の範囲の中で、特に鎌倉市内周辺に密集する横穴状遺構は、江戸時代以降「やぐら」と呼ばれている。文献史料によれば、やぐらが構築された中世においては「やぐら」という言葉は記載されておらず、「岩窟」・「窟」などと表現されている。江戸時代の文献に既に紹介されているやぐらだが、本格的な研究は大正時代以降といえるだろう。それは考古学的な観点からのものが大半を占め、現在も宅地造成や急傾斜地崩落の危険性に伴う発掘調査が多いように思われる。残念ながら既に姿を失い、詳細を知る手立ては報告書のみになっているやぐらも多い。

今回取り上げる資料は、1964～65年にかけて行われた覚園寺裏山やぐらに関する報告書で、今後これを資料として研究するに当たり、そのカード内容を分析した。

2. やぐらの構造

資料の分析にあたり、まずやぐらの概要について以下に述べる。やぐらが岩盤に掘られた横穴状の遺構であることは、既に述べた通りである。図1に示すように、一般的なやぐらの基本形は方形で、内部は玄室と呼ばれる。玄室に入る前の入口部分がやぐら内の横幅より

も狭く「羨道」を設けたもの（図1a）と、やぐら内の横幅と間口の幅が同じ羨道を持たない形式（図1b）がある。壁面及び天井は鑿で丁寧に穿たれ、一般的には方形の玄室を形成しているが、中には玄室を更に掘り進めて副室を設けたり、L字型をしていたりと複雑な構造のものもある。天井は平らなものが大部分であるが、半円形を呈するもの、平らだが奥壁或いは入口に向かって傾斜しているものなどがある。また、途中で段差を設けているものもある。

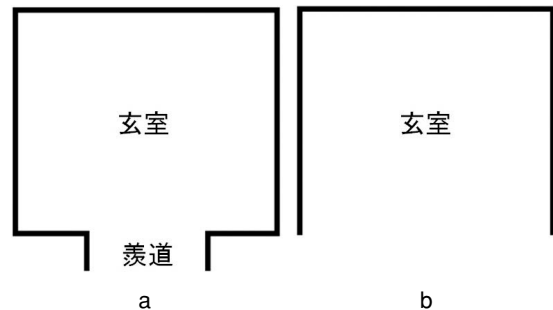


図1. やぐらの内部構造

やぐらの目的は、先に述べたように納骨や供養のための施設である。それは、やぐらの構造の随所に見られる（図2）。壇は壁面に沿って設けられ、骨蔵器を置いたり、壇に穴を掘ってそこに納骨していたり、その納骨穴の上に石塔を置くこともある。また、納骨穴は床面を方形或いは円形に掘り窪めている。やぐら内に安置した石塔は、亡くなった方の追善供養のためのものが多いが、中には石塔の一部に納骨している例も見られる。壇は三方の壁面に沿って設けているもの、奥壁だけに設けているもの、階段状に何段も設けているものなど、形態も様々である。また、壁面の一部に方形や円形の龕を設け、そこに納骨している例もある。壁面に設けられた小さな穴は、納骨を目的とする以外に、灯明皿を置くためのものもある。他にも壁面に

様々な彫刻を施したり、仏像を置いたと思われる痕跡も見られ、やぐらが仏教思想と深く結びついたものだということが伺える。

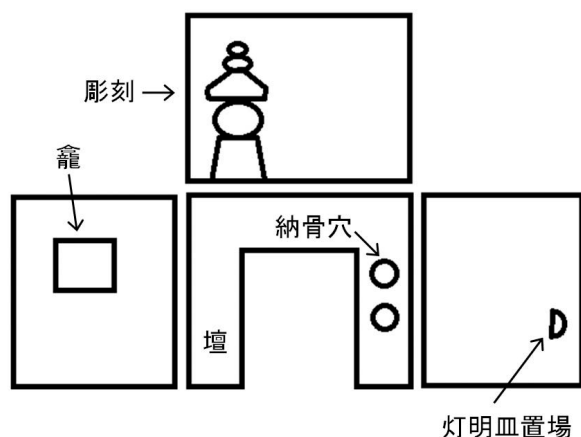


図2. 内部構造と特殊施設の例

3. 『百八やぐら調査報告書』を基にした資料の分析

今回取り上げる「覚園寺裏山やぐら」は、通称「百八やぐら」と呼ばれている。使用する資料にも『百八やぐら調査報告書』と書かれている。やぐらの多くは数基～数十基が密集してやぐら群を形成しているが、中でも最大規模をほこるのがこの覚園寺裏山やぐら群である。山中の斜面に築かれた多量のやぐらは、最大5段³⁾、1段の平場に10基以上のやぐらが横一列に配置されている。

今回取り上げる資料は、鎌倉市教育委員会が所蔵するもので、昭和39（1964）年3月31日と昭和40（1965）年3月31日の日付が入った報告書の奥付によると、安田三郎氏が鎌倉市教育委員会から委託されて行った調査に関するものである。報告書は昭和39（1964）年に一端まとめられ、その後昭和40（1965）年にさらに追加されたということがわかる。調査の目的は、その当時の鎌倉市内のやぐらの状況を記録することと記されている。今回取り上げた記録カードの他に、配置図と実測図があるらしいのだが、これらは見当たらない。また、後述する写真原板も現在は行方が分からなくなってしまっている。奥付にある「写真に依る記録」（以下「カード」という）と示された資料の形態は、2種（便宜上A・Bとする）あり、最も多いA（図3）は覚園寺裏山やぐら1号～177号の計210枚、B（図4）は178号～223号（但し、197号のカードはない）の計57枚で、Bは各やぐらのカード45枚と、それとは別に写真だけを貼り付けたカードが12枚ある。A・Bを合わせ、やぐら各カードの合計は267枚、それに表紙1枚、1964年度の奥付1枚、1965年度の奥付1枚から報告書は構成されている。

Aは、基本的に1基のやぐらに対し1枚のカードが作成されているが、中にはカードの裏面に見取り図を示したものや、記載事項や写真が多い場合は、1基のやぐらに対して2枚のカードを作成していることもある。また、連続して並ぶやぐらを遠くから撮影した写真を掲載しているカードもあるため総数が多い。

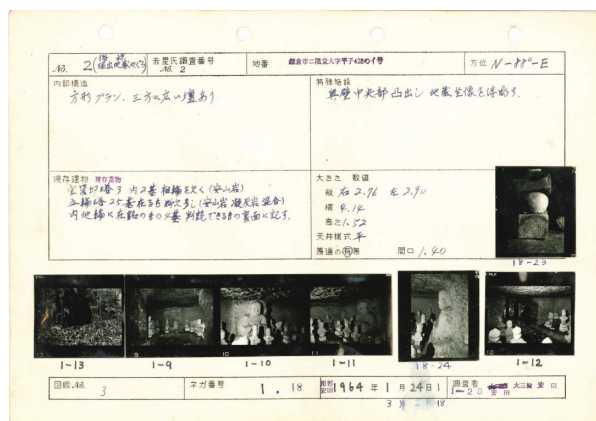


図3. カードA

一方Bは、1基に対し1枚のカードが作成されている。各カードに写真はなく、別紙にまとめて貼られている。

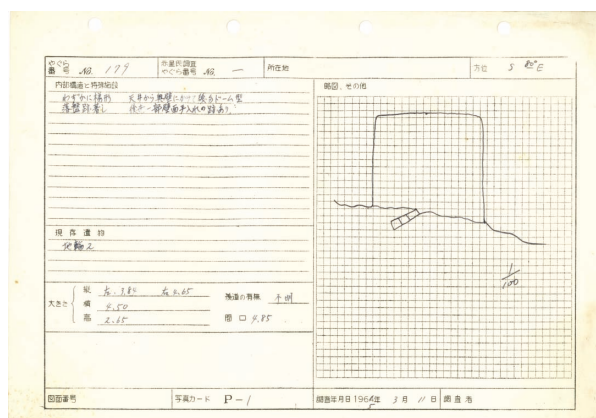


図4. カードB

カードに記された名前から、この調査は安田三郎氏の他に大三輪龍彦氏、大森順雄氏によって行われたことがわかる⁴⁾。カードの記載項目は以下の通りで、該当箇所についてAは青色ないし黒色のペンを用いた手書きと、判子が押されている。Bは青色のペンで書かれている。カードの筆跡は、奥付と同様であるため、安田三郎氏が記したことがわかる。

Aの記載事項は、やぐら番号・地番・方位・内部構造・特殊構造・現存建物・現存遺物・大きさ（縦・横・高さ）・天井様式・羨道の有無・間口・図版番

号・ネガ番号・調査日・調査者である。Bの記載事項は、やぐら番号・所在地・方位・内部構造と特殊施設・現存遺物・大きさ（縦・横・高さ）・羨道の有無・間口・図版番号・写真カード番号・調査日・調査者・略図（実測図）である。両カードとも、やぐら番号については2種類示されている。やぐらの研究は、以前赤星直忠氏により詳しく行われ、その成果は『鎌倉市誌 考古編』をはじめ、学術雑誌や書籍などに収録されている。覚園寺裏山やぐらも、一般的には赤星氏がつけた『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書第7集』の番号を以て、個々のやぐらを区別している。この調査も『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書第7集』を基礎としている旨が、奥付に書かれている。しかし、赤星氏が調査を行った段階では、存在が確認されていなかったのか、特質がなく番号を付けなかったのか定かではないが、番号のついていないやぐらがある。そのため、この調査では新たに番号をつけ直している。そこで、カードには両者の番号を照合するため、通し番号と「赤星氏調査番号」が記載されている。筆者の調査は、このカードの通し番号に従った。例えば安田氏が1号と呼び、赤星氏の番号でも1号に該当する場合は、「1号（赤1）」のように記し、赤星氏による番号がない場合には「223号（赤―）」と補足表記した。奥付によると、昭和39年までの調査段階で27基が追加され、翌昭和40年までの調査において、覚園寺の境内外でそれまで調査されていなかった二階堂西ヶ谷丸山の一群も含め、通し番号が付けられている。それまで160基あまりの番号が付けられていたが、この調査によって223号までになった。

このカードの内容を次頁以降の表1にまとめた。表はカードを基に筆者が作成したもので、内部構造及び特殊施設の文言や記載内容については、カードの文言を引用しつつ、まとめ直して全体の統一を図った。例えば、カードの文中では、劣化や崩壊の度合いについて「激しい」・「著しい」などが用いられているが、これは「著しい」とした。やぐらの形状及び各施設に関する寸法の単位は、「m」に統一した。また、形状の欄に「縦右」「縦左」の項目を設けたが、カードに「縦」という表記しかない場合は、表の「縦右」欄に記し、「縦左」は空欄にした。表中の「―」は、カードの中でもその項目に関して「―」と書かれているか、その項目に関する記載がないことを示している。尚、壁面の呼び方は、方位を基準にすると開口方向が様々で混乱を招くため、やぐらに向かって正面を「奥壁」、やぐらに向かって右側を「右壁」、やぐらに向かって左側を「左壁」とする。

現存遺物の項目で、カードに「なし」と書かれていた場合はそのまま表も「なし」とし、カードが空欄の

場合はそのまま空欄にした。元々カードで空欄になっている場合は、万が一遺物がある可能性も否定できないが、「なし」と書かれている場合は、調査によりないことが確認されていると判断できるためである。

特にやぐらの高さについては、文言が様々だったため、これもある程度統一を図った。即ち、カード中に見られる「壇上から天井まで」・「壇上」・「壇上面から」という文言は、壁面に設けられた壇の上から天井までの長さを指し、これについては数値の下に「壇上」と表記した。この壇は、殆どの場合奥壁に沿って設けられた壇である。尚、壇が奥壁沿いのみ、或いは左右両壁を併せた三方にある場合など形式は様々だが、これについては内部構造及び特殊施設の欄に記載した。また、「地表から天井」・「地表上」は、やぐら本来の床面の高さから天井までを示しており、これは「地表上」とした。一方、「表土上」と表記した場合は、本来の床面の高さではなく、やぐら内に流入した堆積物の表土の上から天井までを意味するため、やぐら本来の高さとは異なる。「壇上」と表記した場合が壇の上から天井までの高さを指すのに対し、「壇の高さ」は床面（地表上・表土上）から壇の上までを指している。

遺物の表記に関して、五輪塔や宝篋印塔などの各部材について、カードの中では「部分」という言葉が用いられているが、1個の部材の中の一部と混同しやすいため、表の中では「部材」とした。

羨道の項目に「○」がある場合は羨道を有し、「×」は羨道を持たない形式である。但し、現在は劣化や後世の改変により、羨道が失われていることがあるため、そのような場合は「○」の後にカードの記述を引用して「痕跡」と記した。また、調査時に羨道がなく、構築当初もその存在が定かではない場合は、「×不明」としてある。既に崩壊している場合は「×崩壊」と表記した。そして羨道があり、カードに羨道の寸法が記されている場合は「○奥行（数字）」とその長さを記入し、単位は「m」に統一した。羨道を有するやぐらの場合、間口の長さが羨道の幅に該当する。一方、羨道がない場合、その多くは横の長さと同様の長さが一致することになる。その他、複雑な構造のやぐらについては、カードの裏面を利用して、その平面図が記載されていることがある。そこに詳細な寸法がある場合と、一部しか寸法が記されていない場合があり、今回は記載されている全ての寸法を表に反映していないことを予め断わっておく。今後、個々のやぐらについての論文に平面図を掲載していくので、複雑な構造のやぐらについては、それを参照していただきたい。

表1. 覚園寺裏山やぐらに関するカード内容

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)							
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式	
1	1	1964.1.24	N4E	4.00		4.00	2.06	1.40	○	平	
2	2	1964.1.24	N88E	2.76	2.90	4.14	1.52	1.40	○	平	
3	3	1964.1.24	N80E	0.80		1.00	0.90	1.00	×	平	
4	4	1964.1.24 1964.3.23	N62W	2.80	3.04	3.46	1.32	1.00	○	平	
5	5	1964.1.24	N80E	1.16		2.18	1.64	2.18	×	崩壊か	平
6	6	1964.1.24	N80W	0.70		2.12	0.90	2.12	×	崩壊か	平
7	7	1964.1.24	N90E	1.80	2.74	4.10	1.14	4.10	×	崩壊か	平か
8	8	1964.1.24	N80W	2.37		3.80	1.83 奥壁中央表土上 0.28 表土下	4.20	×		平か
9	9	1964.1.24	N40W	1.18	0.80	1.23	0.78	1.16	×		平
10	10	1964.1.24	N80E	0.48	1.14	1.64	1.36	1.64	×		平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
1	1	俗称「十三基塔」 覚園寺古図にある 方形プランを呈している 天井に接し三方の壁に棚がある 多量の火葬骨がある 奥壁に壇があり、壇上に納骨穴がある もと13基の塔があったものであろうか 天井に漆喰の痕跡がある	空風輪大小7（内凝灰岩2、他は安山岩） 宝篋印塔基壇1 安山岩 羨道入口左側に地輪1、水輪2、空風輪1 凝灰岩 火輪1 安山岩
2	2	俗称「堀出地藏やぐら」 方形プランを呈し、三方に広い壇がある 奥壁中央部凸出し、地藏坐像を浮彫する	宝篋印塔3 内2基相輪を欠く 安山岩 五輪塔25基在るも断欠が多い（安山岩・凝灰岩混合） 内地輪に在銘のもの4基（内1基に「門□□□ 応永卅 年十月廿一日」「祐阿弥陀仏 逆修 四十九 応永卅三月十五日」「応永□□ 三月□□」とある。応永年間覚園寺造仏に従事した仏師伯耆法眼朝祐の逆修塔。年記は朝祐が歿したときに本塔に追刻したものと思われる。）
3	3	方形を呈している	なし
4	4	方形を呈し、三方に壇がある 奥壇に円形の納骨穴が3個ある 右壇に左に対して2個の納骨穴がある 壇上に小骨片が散乱している	五輪塔17基（内完形11、他は火輪を欠く） 写経石（室町期）1
5	5	俗称「筥やぐら」『鎌倉攬勝考』にこの名を見る 方形を呈している 奥壁中央に直方体龕様切り込みがある 火葬骨を納める 奥壁左・奥壁右・左壁・右壁・天井 各月輪を有する 梵字がある 直径0.50m 各梵字は葉研彫で、壁面は鑿痕を残すも月輪部は平坦に仕上げられ、漆下地を残す 書体は鎌倉期で、当初は刻字中に金泥を塗ったものか	地輪1
6	6	奥壁が半円形を呈している 奥壁左隅に納骨用の切り込みがある この附近のやぐらから出土したという元亨四年銘の板碑が覚園寺にある	なし
7	7	方形を呈している	なし
8	8	俗称「五輪やぐら」『鎌倉攬勝考』にこの名を見る 方形を呈し、奥壁右方に2基、左方に1基の五輪塔浮彫あり 各2区方形に彫り窪めている このやぐらが作られた後に加工されたと考えられるが、塔はなお鎌倉期の様式が認められる 但し、地輪の高さが少し高いのはやや時代降下を示す 地輪下方に方形の納骨穴がある 右壁に方形に加工しかけた痕がある、奥壁と同目的か 奥壁左方の五輪塔の種字中に金箔が認められる 天井の旧状は平面か、現状は剥落の痕跡がある	なし
9	9	方形を呈している 埋没が著しい	地輪3、火輪2、空風輪2、水輪1 以上凝灰岩
10	10	方形を呈している	なし

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
11	11	1964.1.24 1964.3.13	N70E	3.08	2.48	3.50	2.44	3.50	×不明	平
12	12	1964.1.24	N70W	0.95	1.30	1.56	0.88	1.56	×	平
13	13	1964.1.24	N70W	約2.00	約3.10	3.14	1.94	3.14	×不明	崩壊
14	14	1964.1.24	N80W	0.50		1.20	0.50	1.15	×	不明
15	—	1964.1.24	N80W	0.20		0.85	0.15	0.90	×	不明
16	—	1964.1.24	N72E	1.50	1.05	1.50	0.96	1.20	×痕跡あり 17号の玄室に 続く	平
17	—	1964.1.24	N22W	1.40	0.44	3.06	測定不可	3.06	×	大部分崩壊
18	15	1964.1.24	N20W	2.00	1.00	1.18	1.00	1.18	×	平
19	16	1964.1.24	N70E	1.86	1.96	2.28	1.52 中央部	2.28	○痕跡	平
20	17	1964.1.24 1964.1.26	N68E	3.68	1.74	4.16	2.72 中央部	4.16	×崩壊	平（剥落）
21	18	1964.1.24 1964.2.1	N70W	0.82	0.50	0.78	0.72	0.78	×	平
22	19	1964.1.26	N70W	1.66	約1.88	1.48	0.78 壇上 0.20 壇高さ	1.48	×不明	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
11	11	俗称「梵字やぐら」『鎌倉攬勝考』にこの名を見る 方形を呈している 三方の壁の月輪（径0.60m）中に梵字がある 梵字の書体は鎌倉期 月輪部は平坦に仕上げ、梵字・月輪彫刻部に漆下地が残っている	なし
12	12	方形を呈している 奥壁中央上部に方形の切り込みがある 納骨穴か	地輪2、火輪5、水輪2 以上凝灰岩 この他埋没しているものが多数ある見込み
13	13	方形を呈している やぐらの前に大岩石が転落している 天井部分のものか	なし
14	14	埋没のため不明	なし
15	—	埋没のため不明	不明
16	—	方形を呈している 右壁に銅鈺が1本あり、差し込みがある 左壁上部に地輪大の穴があり、地輪がはめ込まれている	なし
17	—	崩壊が著しい	不明
18	15	方形を呈している 壁面左右とも平坦に仕上げられ、各壁面いっぱいに大梵字がある 月輪はなく、薬研彫で書体は鎌倉期 右・左の梵字は風化を受けず良く残存している 右壁前方下部に鉄鈺が1本ある	地輪1 凝灰岩
19	16	方形を呈している 奥壁に線彫りの五輪塔と4箇所鉄鈺がある 五輪塔には種字がある 奥壁に線刻五輪塔と4箇所の鉄鈺あり 左壁の月輪中に梵字があり、7箇所に鉄鈺がある 右壁の月輪中に梵字があり、2箇所に鉄鈺がある 天井に八葉蓮華片の線刻がある 梵字は皆鎌倉期の書体で、薬研彫 壁面は良く平坦に仕上げられている	なし
20	17	方形を呈し、壇はない 三面に大梵字・仏像などの彫刻がある 仏像は深く彫りくぼめた舟形光背中に浮彫してある 風化のため尊像名は不明である 足下に単弁の蓮弁がある 梵字・仏像ともに鎌倉期 右壁上部に漆下地の痕跡が認められる 奥壁に灯明皿用と思われる小穴が数箇所ある 「左壁の梵字に注意」とある	なし
21	18	方形を呈している	入口左側に凝灰岩製標識柱がある 位牌か
22	19	方形を呈している 奥壁に壇があり、その右方に2個の円形（直径は0.17m）の納骨穴がある 壇の幅0.48m	地輪大小3、火輪小1、水輪大小2、空風輪5 皆凝灰岩 土葬骨断片

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
23	20	1964.1.24 1964.1.26	N60W	2.20	1.90	3.20	不明	3.80	×不明	不明
24	21	1964.1.24 1964.1.26	N55W	1.60	1.70	3.68	1.52	3.68	×崩壊か	平
25	22	1964.1.24 1964.2.1	N50W	1.18		1.52	0.64	1.36	○痕跡	平
26	23	1964.1.24	N20W	1.60	1.40	1.40	0.94	1.10	○痕跡	平
27	24	1964.1.24	N45W	2.64	2.83	2.66	1.68	1.26	○痕跡	平
28	25	1964.1.24	N40W	2.80		2.00	1.22	2.00	×	平
29	26	1964.1.24	N40W	1.44		1.50	1.00	1.50	×	平
30	27	1964.1.24	N25W	0.74		1.06	0.84	1.06	×	平
31	28	1964.1.24 1964.3.13	N25W	1.68		1.54	0.92	0.94	○痕跡	平
32	29	1964.1.24 1964.3.13	N10W	1.70		1.94	1.20	1.40	○痕跡	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
23	20	方形の室の左隅に更に第2室がある 第1室奥壁左方に胡粉で白く円を描き梵字を彫刻している 梵字部分は金箔がおされていたものか、その漆下地のみ黒く残っている その右方に矩形に窪められた枠内に2基の五輪塔浮彫がある 鎌倉期の特色があるが、火輪の尖端が異様に丸く反り返っている 塔全体は白色に塗られ、各部に梵字があり、内側に金泥の痕跡がある 下方に方形の納骨穴がある 右壁に5基の五輪塔の浮彫があり、1基おきに大小が配置されている 五輪塔に種字があり、修行門を表している 但し中央の梵字の書体は著しく異なる 第2室にも各壁に五輪塔の浮彫があるが、種字は不明 奥壁4基中右端は崩れて上部を残すのみ 刻字に金泥が残るのは、近年まで埋没して風雨にさらされなかったからである 天井・壁面の一部崩壊は、電柱工事の時工夫の不注意によるもので、現在はコンクリートで天井を補ってある	なし
24	21	玄室は凹形をなし、細部構造は崩壊している 埋没のため不明 奥壁中央に月輪中にある種字（3個）がある 奥壁右方凹所に五輪塔浮彫があり、火輪の丈は低く横に張った形は異様だが、全体は鎌倉期の様式を示している 奥壁左方凹所に舟形光背を持つ地藏坐像（？）の浮彫があるが、風化のため細部は不明 五輪塔に種字はないが、当初は書かれていただろう	不明
25	22	方形を呈している	五輪塔1基、水輪1、火輪3 皆凝灰岩
26	23	方形を呈している	地輪1、火輪1、角柱様のものの上部が宝珠形に風化したもの1 皆凝灰岩
27	24	方形を呈し、三方に2段の壇がある	五輪塔13基（内1基安山岩、1基空風輪を除き安山岩、他は皆凝灰岩） 火輪14、水輪5、地輪2 以上凝灰岩 右壁入口より2基目の五輪塔地輪上面の凹みに火葬骨を納めている状態が見られる
28	25	方形を呈し、三方に壇がある	空風輪2、地輪4、火輪1、皆凝灰岩
29	26	方形を呈している	五輪塔2基、地輪1、火輪2、水輪3、以上凝灰岩 灯明皿2
30	27	方形を呈している	地輪1、水輪1、火輪2、以上凝灰岩
31	28	方形を呈している	五輪塔1基、地輪1、水輪4、火輪5、空風輪2、宝塔の塔身状のもの1 皆凝灰岩
32	29	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁両端に納骨穴がある 奥壁に2基、左壁に1基、右壁に2基の五輪塔浮彫がある 種子はない	空風輪1 凝灰岩 一字一石の写経石が十数個ある

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
33	30	1964.1.24	N25W	1.00		1.52	0.72	1.06	○痕跡	平
34	31	1964.1.24	N5W	1.70		1.82	1.20	1.10	○痕跡	平
35	32	1964.1.24 1964.3.13	N5W	1.28 中央部		1.80	1.00	1.10	○痕跡	ドーム
36	33	1964.1.24	N5W	1.40	1.52	1.52	0.86		○痕跡	平
37	34	1964.1.24	N	1.40		1.58	0.92	1.06	○痕跡	平
38	35	1964.3.2	N50E	1.98	1.92	1.92	1.26	1.16	○	平
39	36	1964.2.1	N40E	1.00	0.63	1.20	0.80	1.05	○痕跡	平
40	37	1964.2.1	N	0.45		0.88	0.52 地表上	0.90	×不明	不明
41	38	1964.2.1	N5E	1.83	1.81	2.17 奥壁	1.22	1.74	○痕跡	平
42	39	1964.2.1	N60W	1.00	破損	1.30	0.65 中央表土	不明	×	平
43	40	1964.2.1	N30E	1.62	1.67	1.75	0.97	1.18	○痕跡	—
44	41	1964.2.1	N25E	0.96	1.10	1.58	0.75	1.47	○痕跡	円形 風化のため
45	42	1964.2.1	N20E	0.95	1.82	1.82	0.83	1.82	×	平
46	43	1964.3.2	N20E	3.00	3.00	3.79	3.02	3.74	×崩壊か	平
47	44	1964.2.1	N60W	1.33	1.26	1.33	1.04	1.30	×	平
48	—	1964.2.1	N50W	0.84	0.81	1.29	埋没	1.29	×	—
49	—	1964.2.1	N60E	0.80		1.41	0.40	1.35	×崩壊	平
50	—	1964.2.1	N60E	崩壊	1.67	2.10	1.06	崩壊が 著しい	○崩壊	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
33	30	方形を呈している	地輪1、火輪2
34	31	方形を呈し、三方に壇がある 壇上奥に接して納骨穴が1個ある	地輪1、空風輪2、火輪1
35	32	周囲の壁は円形を呈している ※1 その他不明 左壁の円形の穴が36号に続く	水輪2、火輪4（内安山岩1） この他に五輪塔の断片が多数埋没していると思われる
36	33	方形を呈し、三方に壇がある 埋没している	火輪1、水輪1、地輪1、空風輪1 皆風化が著しい
37	34	方形を呈し、奥壁に壇がある 納骨穴は不明	地輪4、火輪2、水輪3 火輪の風化が著しい
38	35	方形を呈し、三方に壇がある 納骨穴など不明	地輪7、水輪6、火輪8、空風輪2 以上皆凝灰岩 倒壊
39	36	方形を呈している	水輪1、空風輪1 凝灰岩
40	37	風化が著しく不明	なし
41	38	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁に5基、右壁に4基の五輪塔浮彫がある 左壁は奥壁の1基を残し、他は剥落した痕跡がある 左壁の奥より2つ目は作りかけで、同じ五輪塔が2基あったものが剥落した様子である 合計13基の浮彫があったことになる 他のやぐらの五輪塔浮彫が皆厚い板塔婆式だが、ここのものは立体的で一見実際の塔が在るかに見える 様式は鎌倉期か室町期を思わせ、五輪塔の種子は修行門で書体もやや退化している 奥壁左の2基は五輪塔種子の代わりに妙法蓮華経と刻まれ、日蓮宗の浸透過程を示す資料ともいえよう	火輪1 凝灰岩
42	39	方形を呈している	地輪1
43	40	方形を呈している	火輪1 凝灰岩
44	41	風化のため不明 45号との壁隅に穴がある	火輪1 凝灰岩 風化が著しい
45	42	土砂流入のため不明 44号との壁隅に穴あり	なし（不明）
46	43	大きな方形で、左右両壁奥にそれぞれ奥室がある 各奥室の奥壁にそれぞれ壇がある 左奥室壇上に円形の納骨穴がある 右奥室は全体が一段と掘り窪められている 三方の壁に巨大な五輪塔の浮彫がある 奥壁の塔の五輪塔の種子は不明である 右壁の五輪塔種子は菩提門を示す 左壁の五輪塔種子は発心門を示す 左壁の塔は風化が著しい 書体・五輪塔の様式ともに鎌倉期 ※2 高さは右奥隅水面2.52+55（床面）=302	左奥室に地輪1 凝灰岩 右奥室に地輪1、水輪1 凝灰岩
47	44	不明	空風輪2 凝灰岩
48	—	埋没が著しく不明	不明
49	—	方形を呈している	不明
50	—	方形を呈している 壁面の鑿痕が明瞭に残っている	水輪1 凝灰岩

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
51	45	1964.2.1 1964.3.19	N16W	1.88	2.03	2.10	1.23 壇上	1.37	○	平
52	46	1964.2.1	N30W	約1.00		1.48	0.80 地表上	1.48	×	平
53	47	1964.2.1	N16W	0.90	1.00	1.28	0.82 地表上	1.28	×	平
54	48	1964.2.1	N14W	0.97	0.90	1.00	0.82	1.57	×	平
55	49	1964.2.1	N22W	0.80		1.28	0.95	1.28	×	平
56	50	1964.2.1	N12W	0.70	0.76	1.20	0.50	1.20	×	平
57	51	1964.2.1	N22W	1.67	1.45	2.20	1.25 地表上	2.20	×不明	平
58	52	1964.2.1	N18W	1.14	1.20	1.51	1.04地表上	1.51	×	平
59	53	1964.2.1 1964.3.19	N28W	1.60	1.54	1.68	1.31 床面 0.23 流入土	1.76 前室入口 0.86 羨道幅	○	平
60	54	1964.2.1	N32W	1.59	1.72	2.84	1.00 表土上	1.65	○	平
61	55	1964.2.1	N32W	1.20	1.19	1.41	0.89 地表上	0.93	○	平
62	56	1964.2.1	N23W	0.50	0.52	1.37	0.41 地表上	—	×	平
63	57	1964.2.1	N12E	1.50	1.45	1.51	0.87 奥壁中央表土上	1.34	○痕跡	平
64	58	1964.2.1	N46W	1.74	1.59	1.41	0.96 奥壁壇上	1.12	○痕跡	平
65	59	1964.2.1	N50E	1.37	1.45	1.75	1.24 ※3表土上	1.42	○	平
66玄室	60	1964.2.1	N48E	2.88	2.92	3.42	1.67	1.90 奥行0.65	○	平
66前室	60	1964.2.1	N48E	2.17	2.44	2.54	1.68	—	○	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
51	45	方形を呈し、三方に壇がある 壇の高さは0.26m、右壇幅は0.48m 左壇上に矩形の納骨穴がある 羨道両側上部に梁を止めた切り込みが明瞭に残る 羨道天井部左右に矩形の窪みがあり、柱とめの穴と思われる	地輪10、水輪5、火輪3、空風輪5 皆凝灰岩
52	46	方形を呈している	地輪1、火輪2 凝灰岩
53	47	方形を呈するが、埋没のため構造は不明 奥壁中央に種子を刻まない五輪塔1基の浮彫がある 地輪まで埋没している	風化のため不明だが、五輪塔部材7が埋没している 皆凝灰岩
54	48	ほぼ正方形に近い玄室がある 羨道は認められないが、入口部分に前室的な広がりを示している	五輪塔部材1 凝灰岩
55	49	方形を呈するが、右壁の大部分が欠損している	なし
56	50	方形を呈している 天井は奥から入口に向かって上り傾斜している	なし
57	51	方形を呈している（壇はない） 奥壁左右に底が窪んだ納骨用と推察される半円形の穴がある 右壁上部に方形の彫り込みがあり、その下部に矩形のほり込みがあるが、目的は不明	風化した凝灰岩製の五輪塔部材が11個地表に見られる 鋭利な刃物で切断した面のある火葬していない人骨小片1 切断面が明瞭である
58	52	方形を呈している	なし
59	53	矩形の前室奥壁に方形の玄室に入る羨道がある 三方に壇がある 玄室奥壁壇上右方に円形・左方に矩形の納骨穴がある 玄室内壁の鑿痕が二条の平行な沈線で、特殊な刃物であることを示す	風化した五輪塔断片12 皆凝灰岩
60	54	方形を呈し、奥壁に鎌倉期の様式板塔婆式五輪塔の浮彫（種子なし）が3基ある 右壁の円形の小穴は樹木の根によりできたものか	風化した五輪塔部材2 凝灰岩
61	55	方形を呈している 羨道左壁に門扉をさしたと思われる切り込みがある	地輪4、水輪3、火輪4、空風輪4 凝灰岩
62	56	方形を呈している	火輪1 凝灰岩
63	57	方形を呈している（壇はない） 左壁は破られ、64号と続く	なし
64	58	方形を呈し、奥壁に壇がある 59号と同じ鑿痕がある 右壁が63号と続く 奥壁・左壁に青色塗料のような色調がある	明治の大師像1 頭部欠損
65	59	方形を呈している 床面左奥に納骨穴らしき窪みがあるが埋没している	明治の大師像1 頭部欠損 地輪1、水輪1、火輪1 各凝灰岩 風化している
66 玄室	60	俗称「団子つき」『鎌倉攬勝考』の「団子窟」だろう 矩形の前室があり、羨道を経て玄室に至る 玄室は方形で、奥壁・左右壁の一部に三方の棚がある 中央床面に方形の大きな穴があるが用途は不明 やぐらとしては明らかに鎌倉期だが、穴の方形・地蔵像は室町頃の追加施工によるものか 合葬納骨の目的は不明である	地蔵菩薩坐像（凝灰岩）1体 火輪1、空風輪1 凝灰岩 明治の大師像5 頭部欠損 台座に使用されている直方体の凝灰岩3、内1に中央が円形の穴が上下に貫通している
66前室	60	石切に使用された痕跡がある	

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
67	61	1964.2.1	N52E	1.31	崩壊	1.67	—	1.67	×崩壊	平か
68	62	1964.2.1	N62E	0.70	1.80	1.20	0.91 表土上	1.20	×	平
69	63	1964.2.1	N32E	1.45	1.30	1.75	0.89	0.86	○	平
70	64	1964.2.1	N42E	1.57	1.77	2.16	1.26	1.62	○左は風化	平
71	65	1964.2.1	N40E	1.85	1.60	1.85	0.97 地表上	1.85	×不明	平 大部分崩壊
72	66	1964.2.17	N24E	0.73	0.83	0.67	0.21	0.67	×不明	平か
73	67	1964.2.17	N20E	0.93	0.92	1.21	0.35 地表上	0.90	○	平
74	68	1964.2.17	N60E	1.17	1.15	1.24	0.88	0.84	○	平
75	69	1964.2.17	N45E	0.65	0.20 前部欠損	0.82	0.44 地表上	不明	×不明	平
76	70	1964.2.17	N30E	0.95	1.12	1.12	0.92	約0.80	○痕跡	平
77	71	1964.2.17	N50E	欠損	1.40	1.48	0.90 壇上	不明	○痕跡	平（崩落）
78	72	1964.2.17	N50E	2.75	2.00	3.22	—	1.55	○痕跡	平
79	73	1964.2.1 1964.2.17	N50E	2.40 0.70 1.40 1.00	約2.40 1.74	2.36 2.06 1.81 1.21 1.25	1.27 壇上 0.32 壇高さ	0.75 奥行0.55 高さ1.39	○痕跡	平
80	74	1964.2.1 1964.2.17	N50E	1.60	1.38	1.43	1.45	1.43	×	平
81	75	1964.2.1	N40E	1.60	1.55	1.55	1.20	1.55	×	不明・剥落
82	76	1964.2.17 1964.3.17	N30E	1.85 前室 1.23 後室	1.75 前室	1.89	前1.17 後1.08	1.60	○痕跡	前 平 後 ドーム

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
67	61	方形を呈しているが、大部分が崩壊している 右壁に円形の加工痕がある（後世の加工か）	なし
68	62	方形を呈している 左壁天井部に接して矩形の棚がある （高さ0.30m、間口0.90m、奥行0.28m）	なし
69	63	方形を呈し、三方に壇（幅奥0.50m・左右0.52m）がある	火輪6、水輪7、地輪7、空風輪2 以上凝 灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
70	64	方形を呈している（壇はない）	地輪3、火輪3、水輪1、空風輪2 以上凝 灰岩 空風輪2 安山岩製 明治の大師像2 頭部欠損
71	65	方形を呈し、三方の壁中段に横に棚状の窪みが巡る	火輪3、水輪4 凝灰岩 明治の大師像2 頭部欠損
72	66	崩壊のため不明	不明
73	67	方形を呈している	なし
74	68	方形を呈している	なし
75	69	方形を呈している 左壁は0.20m残り、前面は欠損している	地輪1 凝灰岩 風化が著しい
76	70	方形を呈し、三方に壇（幅奥0.50m・左右0.30m）がある 右壁が風化して穴があき、77号と続く	明治の大師像1 頭部欠損
77	71	方形を呈し、奥壁に壇がある 左右壁に0.60m程折れる口型の壇で、右側は右壁とも風化欠損 し、痕跡を残すのみ 全体に風化が著しいのは、山頂に近く海風を受けるためか 奥壁に2基の五輪塔浮彫があるが、風化して崩れ痕跡のみ 地輪の前に1辺0.20m程の方形の納骨穴がある 床面左側に0.45m角、深さ約0.20m程の窪みがあり埋没してい る	明治の大師像2 頭部欠損
78	72	方形の玄室の更に左奥に小室が附加されている 左壁は大部分が崩落し、上部にわずかに3個の種子（月輪あり） が見えるのみ 右壁も欠損し、下部に五輪塔浮彫2基の地輪だけ残る 各壁面に五輪塔（左壁1・小室奥壁1・奥壁1・右壁2）、宝篋印 塔（奥壁1）等の浮彫がある 三方に壇があるが埋没している カード78-2に「左壁大部分崩落、右壁は五輪の地輪部上大部 分風化して隣接やぐらと通じる」とある	火輪1、空風輪1 凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
79	73	極めて複雑なプランを呈している 左右壁が風化崩壊して隣接するやぐらに続き、下部の痕跡から わずかに判ずることができる 奥室部後方と左方に壇がある	明治の大師像2 頭部欠損
80	74	方形らしきも三方の壁とも大部分が風化崩壊し、隣接するやぐ らに続く	地藏像を浮彫した石塔1
81	75	奥壁の大半崩落・左壁欠損・前部が崩壊している	明治の大師像1 頭部欠損
82	76	前室は方形、奥室は半円ドーム型 右壁の大部分が欠損している 左壁は剥落が著しい	明治の大師像1 頭部欠損

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
83	77	1964.2.17	N40E	1.45	1.65	1.85	1.30	1.85	×崩壊	平
84	78	1964.2.17	N30E	2.30 ※4	2.80 ※4	1.86	1.18	1.86	×	平
85	79	1964.2.22	N7W	埋没	1.32	2.06	0.77 ※5表土上	不明	○ 左のみ痕跡	平
86	80	1964.2.22	N20W	2.92	2.12	2.11	1.07 壇上	0.82	○ 奥行0.31	平
87	81	1964.2.22	N18W	2.09	1.94	1.78	1.23 下段～天井 0.87 上段～天井 0.37 下段高さ	0.86	○ 奥行0.35	平
88	82	1964.2.22	N32E	1.92	1.89	1.90	1.44 地表上 1.06 壇上	0.83	○ 奥行0.75	平
89	83	1964.2.22	N36W	1.07	欠損	1.08	0.69 右隅地表	測定不可	○ 左欠損・痕跡	平
90	84	1964.2.22	N20W	1.60	1.90	1.50	1.12	1.50	×	平
91	85	1964.2.22	N30W	1.57	1.52	1.95	1.35	1.95	○痕跡	平
92	86	1964.2.22	N20W	1.50	1.25	1.60	1.15	1.60	×	平
93	87	1964.2.22	N30W	1.00	1.35	1.20	0.73	1.20	×	平
94	88	1964.2.22	N20W	2.10	1.10	1.65	1.23	1.65	×	平
95	89	1964.2.22	N10W	1.96	1.80	1.53	1.10	1.53	×	平(剥落)
96	90	1964.2.22	N20W	1.94	2.25	1.95	1.18	1.95	×	不明・剥落
97	91	1964.2.22	N20W	2.13	2.20	2.17	1.35	2.17	×	平(剥落)
98	92	1964.2.22	N20W	3.00	2.30	2.15	1.50	2.15	×	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
83	77	方形らしきも両壁の大部分が欠損している 奥壁も大部分が剥落しているため内部構造は不明	明治の大師像1 頭部欠損 仏像1（尊像不明）
84	78	方形を呈するが、左前半・羨道部は欠損している 右壁の一部が剥落している 奥壁から1.30mより前が欠損している	薬師尊像1 大師像 ともに明治年間 写経石らしき小石 若干
85	79	方形を呈している 壇の存在は不明 奥壁に3基の五輪塔浮彫がある 右壁は大半が埋没している 左壁は五輪塔種子（修行門）の彫刻がある	
86	80	方形を呈し、三方に壇（2段）がある（上下壇とも玄室手前で切れる） 壁面仕上げは各面ともよく施行されている 三壁面壇上に各3基ずつ五輪塔浮彫あり 五輪塔全てに種子があり、両薬研彫で書体は鎌倉期 奥壁右塔前に矩形の納骨穴がある 両壁手前隅に角穴がある	なし
87	81	方形を呈し、三方に壇（奥壁のみ2段）がある 下壇上面まで埋没している 各壁面良く加工されている 上壇幅0.28m、下壇幅0.44m	五輪塔12、内1基は空風輪欠損 その他地輪1、火輪2 この内火輪1安山 岩で他は皆凝灰岩
88	82	方形を呈し、三方に壇がある 左壇は奥壇より0.80m下る 奥壇幅0.62m 左壇幅0.46m 左 壇幅0.42m 羨道部内近くに門扉用の切り込みがある 特に上部が明瞭	五輪塔6基 凝灰岩
89	83	大部分が崩壊しているが方形を呈しているか	不明
90	84	方形を呈している 右壁の大部分と左壁の一部が剥落している	地輪3 凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
91	85	方形を呈している 羨道・左壁の大部分が欠損している	明治の大師像2 頭部欠損
92	86	方形を呈するが、前半が崩壊している 風化のため91号との隔壁に穴があいて通じている 奥壁に五輪塔2基が浮彫されているが、風化が著く、空風輪と 火輪の上部を残すのみ 形式は鎌倉期 その左右即ち奥壁両端に幅0.30m、高さ0.85m、奥行0.25mの 略同大の縦長切込みがある 五輪塔または卒塔婆を立てたものか	写経石（一字一石）多数 明治の大師像1 頭部欠損
93	87	方形を呈するが、前半と両壁の大部分が崩壊	火輪3、水輪3、空風輪1、地輪2 皆凝灰 岩
94	88	方形を呈するが、奥壁が幾分円形になっている	明治の大師像1 頭部欠損
95	89	方形を呈している	水輪1 凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
96	90	方形を呈している	明治の大師像1 頭部欠損
97	91	前半の両壁が風化欠損していて詳細は不明	明治の大師像2 頭部欠損
98	92	方形だが隅丸方形を呈している 両壁の大半が欠損している 三方の壁の横に二条の切込が巡り壇をなしている	明治の大師像2 頭部欠損

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
99	93	1964.2.22	N20W	2.05 ※6	2.30 ※6	2.10	1.23	2.10	×崩壊	平
100	94	1964.2.22	N20W	1.20	0.80	1.60	0.59 地表上 0.54 地表下	1.60	×	不明
101	95	1964.2.22	N10W	1.80	1.97	3.39	1.47	3.39	×不明	平
102	96	1964.2.22	N0S	1.60	1.60 上部欠損	1.65	1.10	1.65	×不明	不明
103	97	1964.2.22	N10E	1.40	1.50	1.70	0.90	1.70	×	平
104	98	1964.2.22	N30E	1.15	1.10	1.30	0.60	1.30	×崩壊	平
105	99	1964.2.22	N30E	1.55	1.48	1.75	1.15	1.75	○痕跡	平(剥落)
106	100	1964.2.22	N30E	1.15	欠損	1.75	0.69	1.20	×崩壊	平
107	101	1964.2.22	N70E	2.78 不明 前室相当部	2.85 1.90	2.15 奥壁 1.80 前室部	1.00 奥壁 1.30 前室部地表上	1.24	○痕跡	二段
108	102	1964.2.22	N50E	1.60	1.75 壇上	1.80	約1.30	1.15	○	剥落
109	103	1964.2.22	N-S	2.14	2.00	2.13	1.34 壇上	1.00	○	平
110	104	1964.2.22	N20E	1.05	0.86	1.50	0.84	1.02	○痕跡	平
111	105	1964.2.22	N20E	1.86	1.78	1.82	1.28	1.25	○痕跡	平
112	106	1964.2.22	N10E	2.20	2.53	2.53	1.30	1.28	○痕跡	平
113	107	1964.2.22	N10W	0.57	0.70	1.35	0.65	1.35	×崩壊	崩落
114	108	1964.2.22	N20E	1.82	1.84	1.86	1.60	1.20	○	平
115	109	1964.2.22	N20E	1.96		1.94	1.28	1.20	○痕跡	平
116	110	1964.2.22	N20E	2.30		2.12	1.05	1.37	○痕跡	平
117	111	1964.2.22	N20E	2.05		1.90	1.48	1.17	○痕跡	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
99	93	方形だが隅丸方形を呈している ※6 左右両壁前半が剥離欠損しているため、縦の長さは大体のもの 三方壁の横に二条の切込が巡り壇をなしている	明治の大師像1 頭部欠損
100	94	方形と思われるが、前半両壁の大部分が欠損している 奥壁に五輪塔浮彫の痕跡があるが風化している	なし
101	95	方形を呈するが、前半両壁の大部分が欠損している	明治の大師像3 頭部欠損 1体は大部分風化し、2体はかまち座以下風化が著しい
102	96	前半と両壁の大部分が欠損しているが、方形を呈しているか	火輪1 凝灰岩 明治の大師像2 頭部欠損
103	97	方形を呈するが、前半と両壁の大部分が欠損している 奥壁右方に半円形の小穴がある	空風輪1 凝灰岩 明治の大師像2 頭部欠損
104	98	方形を呈するが、前半部が風化のため欠損している	なし
105	99	方形を呈している	明治の大師像2 頭部欠損
106	100	方形を呈するが、前半部が欠損している	地輪1 水輪1 火輪1 皆凝灰岩
107	101	方形を呈し、三方に壇（奥壁は2段）がある その上に門の字型に更に巡らしている 天井も1段切り込まれている 108号との壁面は風化により大半が欠損している 奥壁中段に数箇所の納骨穴がある	空風輪1 火輪1 凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
108	102	風化のため構造は不明 三方に壇がある	明治の大師像1
109	103	方形を呈し、三方に壇がある 内面の仕上げは極めて良好である 奥壁に納骨穴が1個ある 羨道の門扉用の穴が完備されている	明治の大師像2 頭部欠損
110	104	方形を呈し、三方に壇があるが埋没している 三方の壁面は風化が著しい	明治の大師像1
111	105	方形を呈し、三方に壇がある 各面の壇上に数箇所の納骨穴が認められる	112号との間の入口外に水輪2、火輪3 ともに凝灰岩 玄室内に五輪塔1、風化を受けた火輪1、 空風輪1 皆凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損
112	106	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁に更に1段を設けている 各壇劣化が著しい	113号との間の入口外に地輪1、水輪1、 火輪1 皆凝灰岩 明治の大師像2 頭部欠損
113	107	方形を呈している	114号との間の入口外に五輪塔1基 凝灰岩の鎌倉期の完形塔
114	108	方形を呈し、三方に壇がある 奥壇上に納骨穴がある	115号との間の入口外に凝灰岩製の五輪 塔1基（空風輪欠損） 写経石らしき小石1 明治の大師像2 頭部欠損
115	109	方形を呈し、三方に壇がある	明治の大師像2 頭部欠損
116	110	方形を呈し、奥壁と右壁の二方に壇がある 奥壁壇上に方形の納骨穴2個、右壁壇上に方形の納骨穴が4個ある	奥壇左側の納骨穴に写経石らしき小石が つめてある
117	111	方形を呈し、三方に壇がある 左壇上に円形納骨穴が4個（内に火葬骨）、奥壇上左方に円形納 骨穴1個がある 左壇の羨道に近い箇所が破損している	明治の大師像2 頭部欠損

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
118	112	1964.2.22	N30W	3.00	崩壊	3.20	1.58	崩壊	○痕跡	平
119	—	1964.2.29	N50W	0.47	崩壊	0.63	0.23 表土上	崩壊	×	平
120	113	1964.3.2	N44W	2.22	2.22	2.13	1.23 壇上 0.33 壇の高さ	1.34	○	平
121	114	1964.3.2	N42W	1.27	1.27	1.47	0.84 地表上	1.09	○	平
122	115	1964.3.2	N45E	崩壊	崩壊	崩壊	崩壊	崩壊	×崩壊	崩壊
123	—	1964.3.2	N1W	1.52	1.52	1.90	1.43	1.48	○	平
124	—	1964.3.2	N4W	2.28	2.31	1.89	1.06 壇上 0.33 壇の高さ	1.30	○	平
125	—	1964.3.2	N-S	1.04	1.00	1.27	0.72	1.27	×不明	平
126	—	1964.3.2	N1W	2.70	2.79	奥3.22 手前3.10	1.75 中央部地表 0.24 地表～床	1.87	○ 奥行1.38	平
127	—	1964.3.2 1964.3.19	N82E	崩壊	1.28	1.45	0.72 奥壁中央部 表土上	不明	○	平
128	—	1964.3.2	N8W	1.48	1.70	1.74	1.34 奥壁中央表土上	1.74	×不明	平
129	—	1964.3.2	N10E	1.42	1.55	奥1.85 手間2.12	0.82 壇上 壇の高さ不明	1.40	○	平
130	118	1964.3.2	N12W	1.19	1.27	1.27	0.77	0.90	○痕跡	平
131	119	1964.3.2	N20W	1.27	1.12	1.45	1.07	1.28	○痕跡	平
132	120	1964.3.2	N38E	1.12	0.96	1.46	0.88	0.90	○ 奥行0.60	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
118	112	方形を呈するが、左壁奥から約1.20m程手前にかけて大きく剥落している 三方に壇（数箇所の納骨穴痕がある）があるが埋没している 奥壁中央上部に方形の穴がある	水輪3、火輪1、崩壊した地輪1 皆凝灰岩 明治の大師像3 頭部欠損
119	—	方形を呈している 左壁側が大きく剥落している	不明
120	113	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁中央壇に接し方形（深さ約0.30m）の彫込みがある	五輪塔1（空風輪欠損）、地輪1（下部を穿っているのは納骨穴上に安置するためか）凝灰岩 五輪塔の種子は両葉研彫
121	114	方形を呈している	五輪塔の部材が埋没している
122	115	風化崩壊のため痕跡を認めるのみ	不明
123	—	方形を呈している 壁面の風化崩壊が著しい 天井に若干漆喰が認められる	直径0.10～0.20mくらいの礫多数（敷石か写経石か不明）
124	—	方形を呈し、奥壁に壇がある 壇上に円形の納骨穴5個が横一列に並び、火葬骨が納められている 壁面は若干風化崩壊している 漆喰痕が明瞭	五輪塔の部材が埋没している
125	—	方形を呈するが、壁面は風化している	空風輪1 凝灰岩
126	—	方形を呈し、奥壁に4段の壇がある 左右壁にも奥壁最上段から0.05m程下迄の高さの棚が設けられている 2段目壇上に円形の納骨穴3個が横に並んでいる 左壁奥上部に方形の窪みがある 羨道両側の扉取付箇所は、扉の密着をよくするためか、平坦に仕上げられている 右側扉用の柱取付け穴が明瞭に残っている 天井が入口から奥壁に向けて上に幾分傾斜している	火輪2、水輪2（半ば欠損） 両者ともに安山岩・凝灰岩各1 直径0.17m 写経石1
127	—	方形を呈するが、壁面が風化している 三方の壁面に各2基の五輪塔浮彫の痕跡がある 風化が著しく、空風輪・地輪がわずかに残るのみ 右壁手前の塔の空風輪は損傷が軽が、その下部は埋没している	地輪らしきもの1 凝灰岩
128	—	方形を呈している 奥壁に3基の五輪塔浮彫がある 右の1基は壁面から浮出し、風化して水輪と地輪の一部を残すのみ 左の2基は矩形に彫り決めた区内に浮彫された完形	火輪の風化が著しいもの1 凝灰岩
129	—	梯形を呈し、奥壁に壇がある 右壁に小穴の彫込みがある 灯明皿置場か	地輪1 火輪1 凝灰岩
130	118	方形を呈している 左壁が崩壊し隣接の131号と続く	明治の大師像1 頭部欠損
131	119	方形を呈している 右壁が崩壊し隣接の130号と続く 羨道部両側とも前半下部は風化のため欠損している	明治の大師像1 頭部欠損
132	120	方形を呈している 羨道上部に約0.20m幅の切込みがある 羨道部右側下半部が風化のため欠損している	なし

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
133	122	1964.2.29	N25E	1.52	1.54	1.65	1.00 壇上	0.94	○ 奥行0.45	平
134	123	1964.2.29	N25E	2.24	2.15	1.68	0.93	1.13	○	平
135	124	1964.2.29	N25E	0.80	0.80	1.22	0.58	約1.15 右欠損	○	平
136	125	1964.3.12	N15E	1.70	約1.65 地表上 0.80 地表下	1.93	1.08	1.92	○	平 但し風化
137	126	1964.3.12	N30E	1.34	1.79	1.62	1.33	1.62	×	平 大部分欠損
138	127	1964.3.17	N50E	1.59	1.60	1.49	1.03	1.18	○ 奥行0.90	平
139	128	1964.3.17	N55E	1.84	1.95	2.15	1.26 奥壇上	1.34	○ 奥行0.46	平
140	129	1964.3.17	N30E	2.14	2.18	2.15	1.28 壇上	1.43	○ 奥行0.70 高さ1.54	平
141	130	1964.3.17	N20E	1.49	1.43	1.50	1.04 壇上	1.29	○ 奥行0.65	平
142	131	1964.3.17	N10E	2.40	2.49	2.15	1.20	1.15	○ 奥行0.64 幅 1.15	平 二段

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
133	122	方形を呈し、三方に壇がある 各壇上に1個ずつ円形（直径0.15m）の納骨穴がある 左壁は大部分が風化欠損し134号と続く 壇の高さ0.28m、幅奥0.64m・左0.36m・右0.40m	地輪3、火輪3、空風輪1 皆凝灰岩
134	123	方形を呈するが右壁は風化欠損し133号と続く 奥壁左上隅に龕がある 奥壁に2基の五輪塔（種子なし）浮彫がある 塔高地表上0.88mで、所々に漆下地の痕跡がある 奥壁右隅近くに五輪塔板塔婆が輪郭を決めた区内に浮彫されている	地輪3、水輪1 火輪2、空風輪2 皆風化凝灰岩
135	124	方形を呈するが、風化のため内部構造が幾分円形になっている	凝灰岩の石塔部材らしきものの1個が埋没している
136	125	方形を呈するが、前室様の箇所が認められる 各壁面・天井の風化が著しい	不明 数箇所に石塔の断欠らしきものが埋没している
137	126	方形を呈しているが、各壁面・天井風化が著しい	五輪塔1基、地輪1 皆凝灰岩 明治期の地藏坐像1 尚、やぐら前に地輪2、水輪2、火輪1、空風輪1 皆凝灰岩
138	127	方形を呈している 中央床に矩形の大きな納骨穴（幅0.67m、奥行0.84m、深さ0.40m、周囲に0.10m幅の枠）がある 奥壁に2基の五輪塔浮彫があるが、他の様式と幾分異なる ふくらみの殆ど見られない尖頭形空輪ときわめて低い風輪がある 種子は不明、塔高さ1.00m、鎌倉末期の一様式か 羨道の門扉用穴が明瞭	安山岩の寄せ集め宝篋印塔1基が中央の納骨穴に切石を渡した上に安置されている 火葬骨がある 火輪1 屋根型石造物断欠（長さ0.30m）1 皆凝灰岩
139	128	方形を呈し、三方に壇（奥の壇は1段高い）がある 奥壇幅0.68m・高さ0.27m、右壇幅0.40m・高さ0.21m、左壇幅0.37m・高さ0.22m 奥壇上に納骨穴1個が認められる 左右両壁羨道部と同位置の天井部に門扉用穴（特に左右両壁明瞭）がある	五輪塔2基 明治の大師像1 頭部欠損
140	129	方形を呈し、奥壁に接して壇がある 壇の幅0.80m、高さ0.32m 羨道入口上下左右に羨門取付柱の取付穴がある 取付穴右下幅0.27m 左上・右下の取付溝の彫りこみに注意	五輪塔2基、左の塔の水輪は花崗岩の如く、他は凝灰岩、もう1基は安山岩 1基の地輪に「田智」の対銘がある※7 五輪塔各面に四方門の五輪塔種子がある 明治の大師像1 頭部欠損及び同期の碑1基
141	130	方形を呈し、奥壁に壇がある 壇の幅0.58m、高さ0.31m	明治の大師像2 頭部欠損
142	131	方形を呈し、奥壁から玄室中央まで広い壇がある 床面は羨道より1段下る 壇中程から奥壁にかけての天井は1段下り、傾斜している 壇中央部に矩形の縦溝（幅0.28m、長さ0.47m）がある 壇上右方に円形の納骨穴がある 壇上左方に矩形の納骨穴がある 羨道入口上下左右に門扉取付用の穴がある 左壁は一部風化のため143号に続く	五輪塔4基 皆凝灰岩 明治の大師像1 頭部欠損

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
143	132	1964.3.17	N10E	2.92	2.88	1.66 手前 1.30 奥壁	1.10 壇上 0.30 壇の高さ	1.23	○	平
144	133	1964.3.17	N10E	1.52	1.54	1.54	1.00 壇上	—	○ 奥行0.90	平
145	134	1964.2.29	N30E	1.60	1.60	1.60	1.26 壇上 0.19 壇の高さ	1.36	○ 奥行0.40	—
146	135	1964.2.29	N30E	1.54	1.55	1.52	1.12 壇上 0.22 壇の高さ	0.92	○ 奥行0.33	平
147	136	1964.2.29	N	2.46	0.91	3.32	1.29 奥(右)室地表 0.30 壇の高さ	3.32	×不明	平
148	137	1964.2.29	N20E	1.25 ※8	1.24 ※8	1.04	0.82	1.04	×	平
149	138	1964.2.29	N20E	1.14	2.10	2.50	1.15 壇上	1.21 高さ1.33	○ 奥行左0.47 奥行右0.94	平
150	139	1964.2.29	N50E	2.46	2.56	2.14	1.00 壇上	1.09	○ 奥行0.65	平
151	140	1964.2.29	N10E	—	—	2.51	1.16 地表	1.00	○ 奥行0.53	前 平 後 ドーム
152	141	1964.2.29	N20E	2.55	2.55	2.55	1.67	測定不可	○	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
143	132	<p>梯形を呈し、三方に壇がある</p> <p>左右壁面が風化のため隣接するやぐらに続く</p> <p>羨道部の工作は近世の施工か</p> <p>羨道部の一部は当初の羨門取付穴の痕跡がある</p> <p>壇中央手前に円形（直径0.23m）の納骨穴がある</p>	<p>凝灰岩製地蔵坐像1 頭部は明治期の後補で像高さ0.92m、膝張0.77m</p> <p>元覚園寺前方山腹のやぐらから移したもののという</p> <p>地蔵像後部に雑積されている</p> <p>数十個の五輪塔断欠 皆凝灰岩で風化が著しい</p>
144	133	<p>方形を呈し、三方に壇（奥壇幅0.56m、右壇幅0.32m、左幅0.38m、高さは三方とも0.36m）がある</p> <p>右壁の大部分が風化欠損し143号と続く</p> <p>奥壁上に4個の円形（直径0.20m）の納骨穴が横一列に並んでいる</p> <p>羨道入口に門扉取付用の穴（右上は風化し痕跡のみ）がある</p>	五輪塔2基、空風輪1 皆凝灰岩
145	134	<p>方形を呈し、三方に壇（幅奥壇0.50m、右0.41m、左0.53m）がある</p> <p>奥壇中央に円形（直径約0.25m）の納骨穴がある</p> <p>左右壁手前上部に納骨穴各1がある</p>	明治の大師像2 頭部欠損
146	135	<p>方形を呈し、三方に壇がある</p> <p>壇の幅奥0.60m、右0.32m、左0.34m</p>	明治の大師像1 頭部欠損
147	136	<p>ㄱ字型を呈している</p> <p>左室は風化が著しく入口付近は崩壊している</p> <p>左室奥に壇がある</p>	<p>地輪11 火輪1 空風輪1 皆凝灰岩で風化が著しい</p> <p>いずれも地表に認められるものののみ</p> <p>小写経石20個ほど</p> <p>明治の大師像3 頭部欠損</p>
148	137	<p>方形を呈するが、奥壁が多少丸みを帯びている（奥壁中央部の円形部の長さは0.06m）</p>	明治の大師像1 頭部欠損
149	138	<p>俗称「法王窟」羨道入口上部に「法王」と刻まれている</p> <p>方形を呈し、奥と左の二方に壇がある</p> <p>左壁壇には縁があり、1段下り手前で門扉取付のため切れている</p> <p>奥壇幅0.44m・高さ0.33m、左壇幅0.76m・縁幅0.17m、左壇の終わりから羨道まで0.20m</p> <p>東の羨道入口に二重の扉取付用の丸い穴がある</p> <p>左壁に深さ0.15mの切込みがある、舟形光背のため仏像を安置したものか</p>	明治の大師像6 頭部欠損
150	139	<p>方形を呈し、奥と左壁（左入口側はなし）に壇がある</p> <p>奥壇幅0.50m・高さ0.23m、左壇幅0.34m・高さ0.23m</p> <p>羨道上部内側に門扉取付用の切り込みがある</p>	なし
151	140	<p>前方形・後ろドーム型を呈し、三方に壇がある</p> <p>壇上面まで埋没している</p> <p>羨道部上下左右に門扉取付け用の穴がある</p> <p>両壁入口付近に目的不明の丸穴（入口から約0.10m程奥に直径0.10m・深さ0.08m）があるが目的は不明</p>	地輪1 凝灰岩
152	141	<p>方形を呈し、左右壁に納骨用の高い壇がある</p> <p>奥壁中央上部に方形の龕があり、下方に床に接するドーム型の龕がある</p> <p>床中央に納骨用の矩形の穴がある</p> <p>棚に椽石を止める穴が左右にある</p> <p>右壁手前の天井部が崩壊している</p> <p>羨道部外に前室を思わせる部分がある</p> <p>羨門取付け用の穴が明瞭</p>	地輪1 空風輪1 皆凝灰岩（中央穴）

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
153	—	1964.2.29	N20E	1.86	1.82	2.25	1.30 壇上	1.37	○ 奥行0.40	平
154	143 ※9	1964.2.29	N20W	2.01	2.03	2.00	1.20	1.12	○崩壊	平 中央落盤
155	145 ※10	1964.2.29	N	2.25	3.10	3.00	—	不明	○ 奥行0.90	平
156	※11	1964.2.29	N5E	4.97	4.96	4.53	—	1.40	○ 奥行1.70	平
157	—	1964.3.2	不明	—	—	—	2.10 入口附近地表	不明	○痕跡	平
158	147 ※12	1964.3.12	N20E	3.60	3.49	4.02	1.48 壇上	2.72	○	平
159	148 ※13	1964.3.17	N10W	0.54		1.99	0.74 地表上	1.06	○ 奥行0.20	平
160	149 ※14	1964.3.17	N10E	1.82	1.83	1.93	1.08 表土上	0.96	○ 奥行0.50	平
161	144? ※15	1964.3.2 1964.3.12	N15W	3.82	3.75	奥行1.80 手前1.92	1.15 奥地表上 0.28 地表下 0.57 壇幅 0.15 地表下	不明	○	平 (落盤)

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
153	—	方形を呈し、奥壁に壇がある 奥壁上部に方形の納骨穴（高さ0.41m・幅0.44m・奥行0.41m・奥は円形）がある 底部が彫り窪められている 壇幅0.54m・高さ0.43m 土砂の流入が多い	なし
154	143 ※9	方形を呈している 奥壁下部が壇のようだが、後世の石切痕と思われる 左壁上部に方形（手前縦0.22m・横0.19m・奥行0.28m、中央縦0.27m・横0.26m、奥行0.30m、奥縦0.28m・横0.26m・奥行0.26m）の納骨穴が3個ある 右壁上部に納骨用の長い切り込みがある	火輪1 空風輪1 皆凝灰岩で風化が著しい 火葬骨・火葬していない骨・灯明皿の破片などが散乱している
155	145 ※10	方形を呈し、奥と左の二方に壇（右は不明）がある 奥壇は3段程だが埋没のため詳細不明（後世の石切の可能性もある） 天井から0.66m下り、右壁から1.16mの位置に幅0.13m・縦0.09mの半円形の切込みがある	不明
156	※11	矩形の玄室は後方で左右に窪み、前半部は前室の様な型をし、前室中部に風化した階段（後世の石切か）がある 左壁手前は風化欠損し155号と続く 壁面は漆喰の剥落が多い 奥壁に接し半円形（奥行0.22m・間口0.40m）の穴がある その上部に高さ0.86m・幅0.36m・深さ約0.07mの矩形の彫り込みがある その左側天井に深さ0.11mの円形の小穴がある 右側奥室の窪み部分に石塊を並べて壇をなしている 羨道上部門扉取付け用の穴が明瞭	風化した地輪8（内凝灰岩5 安山岩3） その他数個の石塔断片
157	—	石切に使用されたため構造は不明 天井に残る鑿痕からやぐらとわかる	不明
158	147 ※12	方形を呈し、三方に壇（壇幅奥0.73m、右0.53m、左0.53m、左壇は手前で切れている）がある 奥の壇上に方形（0.56×0.46m）と円形の穴（直径0.26m・深さ0.20m）がある 奥壇上に左右対称に小さな切り込みが4個（左より幅0.10m・0.15m・0.13m・0.10m、奥行0.30m、深さ0.06m）がある	なし
159	148 ※13	矩形を呈し、左壁に壇（幅0.20m・地表上の高さ0.28m）がある 羨門扉取付け用の穴が上部にある 入口に杵状の加工がある	水輪大小各1 ともに凝灰岩
160	149 ※14	方形を呈し、奥に壇があるが埋没している 奥壁中央に方形（天井より0.34m下り、縦0.42m・横0.37m・深さ0.30m）の納骨穴がある 奥壇幅0.32m・0.52m	石塔の断片のような埋没物がある
161	144? ※15	奥の深い矩形だが、風化により梯形状を呈している 奥に壇がある 奥壁上部の横に棚（奥行0.52m・天井より0.23m下り・上下0.36m）があり円形（直径0.18m）の納骨穴がある 地表面は棚まで0.51m 両壁中央に目的不明の穴（0.10×0.10×0.17m）がある 羨門部は狭くならず、玄室の幅で開口している その左右に各2個の羨門取付け用の穴がある 羨門扉用の穴がある 各壁面の風化が著しい	なし

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
162	—	1964.2.1	N40E	0.80		0.94	0.20 地表上	0.94	×	平
163	—	1964.3.12	N80W	1.00	1.00	1.17	0.66	1.17	×	平
164	—	1964.3.12	N80W	0.85	0.96	0.95	0.67	0.95	×	平
165	—	1964.3.12	N10W	1.35	1.45	1.50	0.78	1.03	○奥行0.20	平
166	—	1964.3.12	N80E	6.08	6.07	4.00	3.33	1.78	○	平 (落盤)
167	—	1964.3.2	N80E	7.28	6.95	奥7.53 手前5.76	4.35	1.88	○	平 (落盤)
168	—	1964.3.12	N20E	4.25	4.70	4.25	1.68 入口附近地表上	2.24	○痕跡	平 (落盤)
169	—	1964.3.12	N90E	2.70	2.95	4.30	1.15 奥壁中央地表上	2.30	○痕跡	平
170	—	1964.3.2	N30E	1.56	1.68	1.25	0.84 壇上 0.28 壇の高さ	1.12	○右側風化	平
171	—	1964.3.2	N30E	1.70	1.49	1.34	0.96 地表上	1.34	×	平
172	—	1964.3.2	N30E	2.12	2.16	2.31	1.40	1.13	○	平
173	—	1964.3.2	N52E	1.39	1.39	1.87	1.03 壇上 壇の高さ不明	1.23	○	平
174	—	1964.3.2	N52E	0.40	0.47	1.17	0.71	1.17	×	平
175	—	1964.3.2	N52E	0.98	0.82	1.44	0.96 地表上	1.44	×	平
176	—	1964.3.13	N82W	埋没	埋没	埋没	埋没	埋没	埋没	埋没
177	—	1964.3.19	N24E	0.21	不明	約0.65	約0.15	約0.65	×	不明
178	—	1965.3.11	N80E	不明		約5.00	不明	約5.00	×	—
179	—	1965.3.11	S80E	4.65	3.84	4.50	2.65	4.85	×	—
180	—	1965.3.11	N62W	0.60	0.25	0.80	0.70	0.88	×	平
181	—	1965.3.11	N60W	0.65		1.00	0.80 壇上	1.00	○右側欠損	平
182	—	1965.3.11	N55W	1.35		1.35	0.95 壇上 0.20 地表～壇	0.98	○	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
162	—	方形を呈している 埋没が著しい	埋没土上に江戸期と思われる灯明皿2
163	—	方形を呈している	火輪2、水輪2 皆凝灰岩
164	—	方形を呈している	なし
165	—	方形を呈している	なし
166	—	方形を呈している	なし
167	—	方形を呈している 右床に穴があり、この下に別室がある 左壁手前に通路状の横杭がある 左側手前床に円形（深さ約0.30m・直径1.03m）の穴がある	奥壁に十三仏像（明治期か）を安置した 龕がある
168	—	右壁に羨門扉取付け用の穴の痕跡がある 当初は方形の如きも、現在は両壁天井共に崩壊崩落のため、円 形に近い形に変形している	五輪塔2 安山岩 地輪2、水輪5、火輪3、空風輪4 皆安山 岩
169	—	方形を呈している 土砂の流入が多い	地輪13、水輪15、火輪11、空風輪15 （五輪塔）傘石2、塔身1、基壇1（宝篋印 塔）皆安山岩
170	—	方形を呈し、奥壁に壇がある	地輪4、火輪2、水輪1、空風輪2 皆凝灰 岩
171	—	方形を呈している 奥壁中央上部に方形の切込み（納骨穴か）がある	なし
172	—	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁中央上部に方形の輪郭がある	地輪2、火輪1、水輪1、空風輪3 皆凝灰 岩
173	—	方形を呈し、三方に壇がある	地輪1、水輪1 皆凝灰岩
174	—	方形を呈するが、大部分が崩壊している	不明
175	—	方形を呈している 奥壁左方に半円形の彫込み（灯明皿置場か）がある	地輪1、水輪1 凝灰岩
176	—	大部分が埋没しているため不詳 奥壁上部の露出部にに鑿痕があり、やぐらとわかる	不明
177	—	不明	不明
178	—	個人宅にある 大部分が埋没し、上部がわずかに見えるのみ 構造は不明	宅前の小川から移した石塔部材（空風輪 1（「妙法」の刻字が四方にある）、火輪2、 水輪1 皆安山岩）
179	—	個人宅にある わずかに梯形を呈している 天井から奥壁にかけては幾分ドーム型を呈している 落盤跡が著しい 一部後世の加工痕がある	地輪2 安山岩
180	—	方形を呈している 前半部が欠損している	地輪4、水輪3、火輪1、空風輪3 皆凝灰 岩で風化が著しい
181	—	181～187が一行に並んでいる 方形を呈している 奥壁に壇がある	五輪塔2基、地輪1、空風輪小3 皆凝灰 岩
182	—	方形を呈し、三方に壇がある	なし

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
183	—	1965.3.11	N55W	1.32		1.35	0.80 壇上 0.18 壇高さ	1.14	○	平 一部剥落
184	—	1965.3.11	N50W	0.95 玄室内		1.15	0.88 壇上 0.05 壇高さ	0.95	○	平
185	—	1965.3.11	N40W	1.76	1.64	1.78	1.03 壇上 0.20 壇高さ	1.07 壇上まで	○	平
186	—	1965.3.11	N40W	1.00	1.20	1.30	0.80 壇上 0.05 地表～壇	1.30	×不明	平
187	—	1965.3.11	N28W	1.30	0.95	1.50	約0.50 地表上	1.50	×不明	不明
188	—	1965.3.11	N14W	0.80	0.80	1.30	約0.70 地表上	約1.50	×不明	不明
189	—	1965.3.11	N59W	1.60	1.37	1.17	不明	約1.19	×不明	崩壊
190	—	1965.3.11	N48W	1.35	1.62	1.13	0.78 壇上 0.20 地表上	1.13	×不明	崩壊
191	—	1965.3.11	N48W	3.15	2.60	3.72	1.15 壇上 0.10 壇高さ	1.00	○	崩壊
192	—	1965.3.11	N40W	3.25	3.30	3.90	1.25 壇上 0.25 壇高さ	約1.40	○	平
193	—	1965.3.11	N10W	不明	0.90	1.20	0.85 地表上	不明	○左側のみ	崩壊
194	—	1965.3.11	N22W	1.65	1.70	2.05	1.00 壇上 0.20 壇高さ	約1.15	○	崩壊
195	—	1965.3.11	S70W	2.42	3.07	4.40	1.20	4.40	×不明	平
196	—	1965.3.11	N82W	4.18	4.18	4.11	2.00	1.90	○	平 (崩壊)

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
183	—	方形を呈し、三方に壇がある 天井の一部が剥落している	なし
184	—	方形を呈し、奥壁に壇がある	なし
185	—	方形を呈し、三方に壇（奥壇上に火葬骨入りの納骨穴2個）がある 奥壁にドーム型の彫り込みがあり、間隔0.20mで各直径0.20mの同形を成している 左上部に羨門扉取付け用の小穴（幅0.15m・高さ0.15m・奥行0.12m）がある	なし
186	—	方形を呈し、奥壁に壇がある 前半部欠損のため羨道部は不明	なし
187	—	方形を呈しているが構造は不明 天井の前半大部分が欠損している	なし
188	—	188～193号がー列に並び、181～187号の上段に位置している 方形を呈すると思われるが、大部分が崩壊し天井・各壁面・羨道など不明 崩壊のため、縦は0.80mを残すのみ 以前古い木製角塔婆があり、日野云々と記されていたという やぐら前の坂道を古来日坂と呼ぶがその理由は不明である	なし
189	—	方形を呈するが、崩壊により天井はなく、その他構造も不明 壁面は極一部を残すのみ	水輪（大）1、火輪（小）2 皆凝灰岩
190	—	方形を呈するが、天井の一部を残すのみで大部分崩壊 奥壁に壇がある 三方の壁とも一部を残すのみで大部分は崩壊	なし
191	—	長方形を呈している 三方の壁面は原状を良く残している 右壁手前の凹所は後からの施設かもしれない 左壁に接する壇上に納骨穴らしきもの（2個）がある	地輪2、火輪3、空風輪3 皆凝灰岩 地輪1個が半分程欠損しているが、上下両面に納骨用の窪みがあり、資料として大切だと思われる
192	—	方形を呈し、三方に壇がある 奥と右壁は壇上部が彫り窪められている 左壁は不明	地輪3、水輪1、空風輪21、火輪1 皆凝灰岩
193	—	方形を呈している 壇については不明 天井の大半が崩壊している 右壁前半部が欠損している	なし
194	—	方形を呈し、三方に壇がある 奥壁の壇は右方で広がっている 天井は大部分が崩落している 壁面はかなり鑿痕が見られる	空風輪1、地輪1 皆凝灰岩 地輪は1辺0.30mで1面に種字の一部が墨書きされていて、刷毛書きの見事な書体
195	—	方形を呈しているが、前半部は崩壊・埋没している	なし
196	—	方形を呈している 天井は平天井だが、剥落が多い 左右両壁手前に羨門取付け用と思われる穴がある	なし

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
198	—	1965.3.11	S60W	1.00	3.00	4.60	2.00	4.60	×不明	不明
199	—	1965.3.11	S60W	不明	不明	不明	不明	不明	×不明	不明
200	—	1965.3.11	S85W	3.20	2.90	3.20	2.00 右方にて	1.35	○前半欠損	平
201	—	1965.3.11	S86E	1.20	1.15	1.50	0.82	0.80	○	平
202	—	1965.3.16	S80E	0.87	0.80	1.00	0.77	1.00	×	平
203	—	1965.3.16	S80E	1.23	1.24	1.35	0.85	0.92	○痕跡	平
204	—	1965.3.16	S82E	1.20	1.20	1.25	0.95	0.90	○	平
205	—	1965.3.16	S72E	1.10	1.20	1.20	0.70	不明	○痕跡	平
206	—	1965.3.16	S60E	1.14 ※17		1.05	0.30 入口	0.90	○	ドーム
207	—	1965.3.16	S60E	1.24	1.20	1.24	0.80	1.00	○	平
208	—	1965.3.16	S72E	1.08		1.24	不明	不明	○ 但し右側欠損	不明
209	—	1965.3.16	S42E	1.82	1.18	1.20	0.40	不明	○但し右側の 痕跡のみ	—
210	—	1965.3.16	S40E	1.15	0.97	1.10	0.77	1.07	○ 但し右側欠損	平
211	—	1965.3.16	S58E	2.05	1.36	1.92	0.90	1.65	○ 左側のみ	前半丸 後半平
212	—	1965.3.16	S58E	約1.03	約0.55	1.45	0.35	不明	○但し右側の 痕跡のみ	—
213	—	1965.3.16	S58E	0.87	1.28	1.20	0.55	0.96	○ 右側のみ	平
214	—	1965.3.16	S50E	1.20	1.25	1.25	0.34	1.21	○	平
215	—	1965.3.16	N84W	2.40	2.70	2.70	2.05	2.70	×	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
198	—	個人宅にある 方形を呈するが、大部分が崩壊しているため原状は不明 天井も殆どない 昭和27年頃このやぐらから頭蓋骨が出た このやぐらの上左に防空壕と思われる穴がある	なし
199	—	個人宅にある 198号に接し右側にある 大部分が崩壊している	不明
200	—	個人宅裏にある 方形を呈し、奥に壇の窪みがある 天井は平らだが、左から右に傾斜が著しい	五輪塔3基 宝篋印塔の傘1 皆安山岩 現在覚園寺にて保管 空風輪1 安山岩 ※16 現存
201	—	梯形を呈している 奥壁に奥行0.60m程の壇がある様子だが、埋没のため殆ど不詳	火輪1 凝灰岩
202	—	方形を呈している 右壁は風化して203号に通じている	地輪2 凝灰岩
203	—	方形を呈している 奥壁に奥行0.80m程の壇がある様子だが、埋没のため不詳 奥壁が若干剥落している 表土に火葬骨を含む	なし
204	—	方形を呈している 奥壁に奥行0.60m程の壇がある様子だが、埋没のため不詳 壇上に円形の納骨穴が2個ある	火輪3 地輪2 空風輪1 皆凝灰岩
205	—	やや梯形を呈している 羨道の右側、天井の部分は風化のため崩壊している	なし
206	—	前方後円形を呈している 天井から壁にかけてドーム形をしている 埋没が著しい	不明
207	—	方形を呈している	地輪3、水輪3、火輪6 皆凝灰岩
208	—	大部分が埋没しているため不詳だが、方形を呈していると思われる	不明
209	—	方形を呈するが、前半部が崩壊している 奥壁右側に切れ込みがある	なし
210	—	方形を呈している 左右奥に小さな壇があり、地輪として使用した	火輪2、空風輪1 皆凝灰岩
211	—	長方形を呈している 天井は玄室前半両隅に丸みがあり、玄室後半部は平天井	地輪12、水輪13、火輪15、空風輪7 皆凝灰岩 他にも埋没したものがある見込み 附近のやぐらのものを集めたのか
212	—	大部分が崩壊しているため詳細不明 奥壁と左右壁がわずかに残るのみ	不明
213	—	方形を呈している 天井は平らだが大部分が崩壊している 右側羨道上部に溝が天井に沿ってある	火輪1、水輪1 皆凝灰岩
214	—	方形を呈し、三方に壇があるが埋没している 奥壁中央及び右方に円形の納骨穴が2個ある 羨道両壁に小穴がある	地表に火葬骨が若干ある
215	—	方形を呈している 左壁中央に楕円形の穴が風化のためあき、外部と通じている 外部までの厚さは約1.00m 玄室中央に円形の納骨穴がある様子だが、埋没している	なし

覚園寺裏山やぐらに関する研究

番号	赤星 番号	調査日	方位 (°)	形 状 (m)						
				縦右	縦左	横	高さ	間口	羨道	天井様式
216	—	1964.3.16	S74W	1.95	1.70	3.00	1.88	3.00	×	平
217	—	1965.3.16	S60W	2.10	3.45	4.60	1.92	4.60	×	平
218	—	1965.3.16	N80W	2.95	3.17	3.00	1.50	3.00	×	平
219	—	1965.3.16	N85W	— 略図はあるが、具体的な寸法は書かれていない	—	—	—	—	×	平
220	—	11965.3.16	N85W	— 略図はあるが、具体的な寸法は書かれていない	—	—	—	—	×	平
221	—	1965.3.16	N85W	— 略図はあるが、具体的な寸法は書かれていない	—	—	—	—	○但し右側の 痕跡のみ	平
222	—	1965.3.23	N32W	2.10		2.05	1.27 奥壁	1.60	○	—
223	—	1965.3.23	N30W	3.40		3.70	1.20 壇上	1.20	○	平

番号	赤星 番号	内部構造及び特殊施設	現存遺物
216	—	長方形を呈していると思われる 天井は平天井と思われるが剥落が著しい 玄室左右相象に方形の納骨穴2個がある様子だが、埋没している	なし
217	—	方形を呈していると思われる 奥壁は風化のため右側が凹んでいる	なし
218	—	方形を呈している 奥壁右側下部に方形の窪みがある 以前人が住まいとして使用していた痕跡がある	地輪2、水輪1 皆凝灰岩で風化が著しい
219	—	221号まで3ヶ所が一帯の構造をしているが、独立させて調査した 幾分平行四辺形を呈している 奥壁右側下部に凹所がある 自然のものではなく工作したものだろう 左壁は斜め、楕円形に風化した穴があき、外部と通じている 右壁は風化のため又は工作によるものか、右隣の220号と通じている 床面は220号と0.60mの高差がある 直径0.60mの円形の納骨穴1個がある 3ヶ所一帯は1965年2月下旬に大森氏が偶然見つけた	なし
220	—	219号に隣接し3ヶ所の中央最大のものであり、中心をなしている 原形は方形と思われる 壁面は割合に原状を残している 右に221号が接しているが、隔壁は風化して一部を残すのみで、広く通じている 右壁は風化し、隔壁が天井から一部下りて残るのみ	—
221	—	219・220号と一帯のもので、わずかに残る隔壁で220号と分ける 方形を呈している 床面は220号と0.60mの高差がある	なし
222	—	方形を呈している 天井は奥に向かってかなり傾斜しているが、風化のためかもしれない 三方の壁とも風化が著しい 床面は風化のため岩粉に厚く覆る	不明
223	—	方形を呈し、三方に2段の壇がある 壇上数箇所に納骨穴がある様子だが、床面は不明 近年まで人が住んでいたものか残された器物が散乱し、畳の腐ったものなどで惨状を呈している やぐらとしては非常に立派な構造で貴重である	不明

表中の※について以下に説明する。※1 35号（赤32）の内部構造には、「その他不明」と書かれているが、これが何を指しているのかわからない。※2 46号（赤43）の高さに関する記載の中に、「水面」とあることから、やぐら内に水が溜まっていたということがわかる。このやぐらは、現在も入口側から内部に向かって傾斜しており、雨水が浸入するとやぐら奥に溜まりやすい。カードでは「 $2.52 + 55$ （床面）= 302」と書かれているが、「2.52」は「252」で、単位はcmと思われる。※3 65号（赤59）の高さについて、このカードは「表土上」としているが、もうひとつの大三輪家所蔵のカードには「地表上」とされている。両者の言葉は意味合いが異なり、やぐら本来の高さなのか、堆積物が含まれているのか定かではない。同様の表現は※5 85号（赤79）にも見られる。※4 84号（赤78）は、縦の長さの項目に「奥壁から1.30mより前が欠損している」と但し書きがある。※6 99号（赤93）は、左右両壁の前半が剥離欠損しているため、縦の長さは大体のものと記されている。※7 140号（赤129）内の地輪の1つに「田智」の対銘があると書かれているが、大三輪家所蔵のカードは、これを「母地」としている。※8 148号（赤137）の縦左右の長さは、内部構造及び特殊施設の項目の（ ）に加筆したが、形状の欄に記した長さよりも、奥壁中央が最も長い半円形をしている。その半円形に張り出した長さは0.06mと記されているが、縦の長さの項目には左右両壁の間口から奥壁角までの長さを記載した。※9 154号は、赤色の色鉛筆で赤星番号「143」が加筆されている。※10 155号も赤色の色鉛筆で赤星番号「145」が加筆されている。※11 156号は、「赤星145の左側」と記されていて、特に番号は付けられていない。※12 158号は赤色の色鉛筆で「147」と書かれている。※13 159号は赤色の色鉛筆で「148」と書かれている。※14 160号は赤色の色鉛筆で「149」と書かれている。※15 161号は赤色の色鉛筆で「144？」と書かれている。この辺りについては、幾分番号の付け方が曖昧なようである。※16 200号（赤－）の現存遺物の項目には、「空風輪1 安山岩」の後に「現存」と書かれているが、特に大きな意味があるとは考えにくい。※17 表1における206号（赤－）の縦の寸法は、羨道の長さと玄室の長さを足したものである。

表1を基に3-1から3-10に記載内容の分析をまとめた。

3-1. 調査日

各カードの記載事項をまとめると、調査は表2のように行われている。尚、同一のやぐらを数日にわたって調査していることもあるため延べ日数である。多い日は、1日に30基以上のやぐらの調査を行っている。調査

者の多い日は、安田氏・大三輪氏・大森氏の3人で行ったとはいえ、短期間で調査し緻密な実測図も作成している。

表2. 調査日

日付	(箇所)	日付	(箇所)
1964年 1 月24日	36	1964年 3 月13日	5
1964年 1 月26日	4	1964年 3 月17日	10
1964年 2 月 1 日	39	1964年 3 月19日	4
1964年 2 月17日	12	1964年 3 月23日	1
1964年 2 月22日	34	1965年 3 月11日	23
1964年 2 月29日	16	1965年 3 月16日	20
1964年 3 月 2 日	24	1965年 3 月23日	2
1964年 3 月12日	10		

3-2. 開口方向

カードに記載されている方位は、やぐら入口から奥方向へ見た遺跡の主軸方向が記されている。そこで、それを基にやぐらの開口方向を8方位に分類し、表3にまとめた⁵⁾。尚、109号（赤103）・125号（赤－）の2基のやぐらについては、「N-S」と表記されていた。南北に通る主軸のどちらが開口部か判らないこと、誤植の可能性も否定できないことから、今回この2基は「記載なし（－）・不明」の項目に入れた。

表3. やぐらの開口方向

開口方位	(基)	(%)
南	75	33.8
南東	44	19.8
東	20	9.0
北東	3	1.4
北	0	0.0
北西	8	3.6
西	22	9.9
南西	47	21.2
記載なし（－）・不明	3	1.4

表3によると、南向きに開口するやぐらが最も多く、全体の約3割を占めた。多い順に南・南西・南東方向で、これら南寄りの合計は166基あり、殆どが南側に開口していることがわかる。西・南西・北西の西よりに開口するやぐらの合計は77基で、東・南東・北東の東側に開口するやぐらは67基である。最も少ないのは北・北東・北西の北側に開口するやぐらで、合計11基という結果であった。従来から、各地のやぐらは南側に開口しているものが多いといわれ、それを宗教的思想と関

連して考えられることもあった。中にはそれを意識して穿たれたやぐらもあるだろう。しかし、鎌倉市を囲うように広がり、複雑に入り組んだ谷戸を利用すると、必然的に南に開口するやぐらが増えるという地形によるところが大いに関係していると推察される。岩盤を挟んで両側にやぐらを形成している瑞泉寺裏山やぐらや寿福寺墓地のような例もあるが、基本的には露出した岩盤は山を形成しているため、その反対方位にもやぐらを形成することはできない。それは、この覚園寺裏山やぐらもまた同様である。

3-3. やぐらの規模

やぐらの規模は、一般的に2m四方くらいが基本といわれている。小型のものでは、北条常盤邸跡や寿福寺境内の一部に見られる竈状で、大型になると明月院の羅漢洞のように幅7m程のものまで様々である。今回は、表1にまとめた縦横の形状を基に、やぐらの規模を9種に分類し、表4にまとめた。規模の目安として1間以下を「小」、1間～2間を「中」、2間以上を「大」とし、縦横を9種のパターンに分類した。縦に関しては、左右の長さが記されていることがあり、例えばどちらかが「小」、もう一方が「中」に分類される場合は、長い方の「中」を縦の規模にした。崩壊・埋没などにより縦横いずれか、或いは両方とも測定できない場合は、「記載なし・不明」の項目に分類した。

表4. やぐらの規模

規模	(基)	(%)
縦：横＝小：小	100	45.0
縦：横＝小：中	18	8.1
縦：横＝小：大	1	0.5
縦：横＝中：小	9	4.1
縦：横＝中：中	52	23.4
縦：横＝中：大	12	5.4
縦：横＝大：小	0	0.0
縦：横＝大：中	1	0.5
縦：横＝大：大	8	3.6
記載なし・不明	21	9.5

やぐらは、必ずしも明確な寸法で造られているわけではないようであり、また長い年月の中で壁面の崩落・磨耗などが生じ、大きさが変わってしまっていることもある。さらに、近世に石切場として利用したり、改良して倉庫にしたり、戦時中は防空壕にしたりと、構築当初から現代までに改変されていることも多いため、必ずしも構築当初の長さではない。1964～1965年の調査時から現在までの間にも、形状に何らかの変化

が生じている可能性もあるため、大まかな傾向として捉えたい。約50年後の形状として、再度測定し直す必要がある。

一方が1間以下に対し、もう一方が2間以上という大小の組み合わせのやぐらは少なく、縦横両者とも小規模、両者とも中規模が多いという傾向が見られた。縦横ともに小規模のやぐらは、全体の半数近くを占めている。やはりこれまで一般的なやぐらといわれてきたように、2m四方のやぐらがこの覚園寺裏山やぐら群においても多い。現在、各やぐらの配置場所の確認を行っており、この作業により多くの小規模のやぐらと、その中に点在する中型・大型のやぐらが配置された意味をさぐる手がかりとなるだろう。

3-4. 羨道

羨道について、カードの記述に基づき表5のようにまとめた。

表5. 羨道の形式

	(基)	(%)
羨道有り	71	32.0
羨道有り・痕跡	39	17.6
羨道有り・崩壊	2	0.9
羨道有り・左側風化	6	2.7
羨道有り・右側風化	7	3.2
羨道無し	49	22.1
羨道無し・崩壊	18	8.1
羨道無し・痕跡	1	0.5
羨道無し・不明	27	12.2
前半欠損	1	0.5
埋没	1	0.5

現在の状態は様々であるものの、羨道を持つもの(羨道有り、羨道有り・痕跡、羨道有り・崩壊、羨道有り・左側風化、羨道有り・右側風化)の合計は125基で、全体の56.3%にあたる。不明のもの、埋没したり崩壊して原型を失ったものの中には、元は羨道のあったものが考えられるため、そうすると半数以上に羨道が設けられていたことになる。

羨道入口部分には、扉を取り付けるための方形の切り込みが残っていることがある。それらについても、カードには一部記述が見られたため、内部構造及び特殊施設の項目に記した。扉を取り付ける場合は、上下に取り付け用の穴が必要となるが、床面近くの切り込みが残っている例はあまりない。その理由として埋没したり、風化により掘削されたということが考えられる。その扉は木製と考えられ、長い年月の中で朽ちた

り取り除かれたため、扉の材木も残念ながら今は目にすることができない。各地のやぐらでは、木製の扉ではなく切石で入口を塞いでいる例もあるというが、覚園寺裏山やぐらの場合はそのような例は恐らく少ないと思われる。

3-5. 天井様式

天井様式について表6にまとめた。

表6. 天井様式

様式	(基)	(%)
平型	163	73.4
平か	4	1.8
平・崩壊	10	4.5
平・剥落	4	1.8
崩壊	9	4.1
剥落	1	0.5
ドーム型	3	1.4
前半平型後半丸型	2	0.9
前半丸型後半平方	1	0.5
二段	2	0.9
埋没	1	0.5
不明	14	6.3
記載なし (一)	8	3.6

表6の結果から、平天井が73.4%と圧倒的に多いことがわかる。「平か」と示したものはカードの文言を引用したもので、調査時にはやや形が変化しているものの、構築当初は平天井だったと予想される場所である。途中で高さの異なる「二段」の内、142号（赤131）は平天井で2段式と記されている。また、もう1基の107号（赤101）も、同様に平天井の可能性が考えられる。ドーム型の内、44号（赤41）は、風化のため円形になっているとカードに記されているため、これも構築当初は平天井だった可能性は否定できない。従って天井様式については、構築当初平らに成形していたということが全体にいえるのではないだろうか。

3-6. 内部装飾 浮彫り

やぐらの各壁面・天井などに様々な加工を施し、荘厳な造りをしていることがある。そこで、やぐら内の浮彫り・線刻について該当基数と数と全222基中の割合を表7にまとめた。何らかの浮彫り・線刻のあるやぐらは、延べ33基であった。さらに、これらの中には数種類の装飾が同一やぐら内に施されていることもあり、それらをまとめ直すと222基中28基、全体の12.6%しか該当しないことがわかった。この数は筆者の予想より

もはるかに少なく、従来着目されてきた装飾性豊かなやぐらは、極一部でしかなかったことになる。

表7. やぐら内の浮彫りと線刻

	やぐら数 (基)	(%)	数
五輪塔	19	8.6	76 基
宝篋印塔	1	0.5	1 基
梵字	8	3.6	28 個
仏像	3	1.4	5 体
光背	1	0.5	1 個
八葉蓮華	1	0.5	1 個

内訳を見ると、仏像のうち2号（赤2）・24号（赤21）は地蔵菩薩坐像を各1体ずつ彫り出している。20号（赤17）は、9個の梵字とともに3体の仏像が彫られている。これらは地蔵菩薩ではないことはわかるものの、具体的にどのような仏を表現したのかわからない。光背のみを彫っているのは、俗称「法王窟」と呼ばれるやぐらで、このやぐらは入口外の上部に「法王」と彫られている。この「法王」の字については、江戸時代の文献でも触れられている。そのやぐら内の左壁に、光背が彫り窪められている。恐らく尊像は木造物か、或いは石造製であっても壁面とは独立したものを置いたと推察される。同様に、光背のみを壁面に表現した例は、朱垂木やぐらが有名である。

八葉蓮華は、19号（赤16）の天井に線刻されており、その存在を予め知らなければ見過ごしてしまう。同じデザインを彫ったやぐらは他に例がない。同一やぐら内の奥壁には、梵字の入った五輪塔の浮彫りが線刻されている。五輪塔の例は多いものの、線刻されているのはこの1基のみである。左右両壁はそれぞれに梵字が大きく施されている。

宝篋印塔の浮彫りは、東泉ヶ谷やぐら群・瑞泉寺裏山やぐら群にも1基ずつ見られるが、このやぐら群では78号（赤72）1基のみである。それも、現在では風化により姿が失われつつある。

梵字の多くは月輪を有するもので、月輪や梵字は両葉研彫りされ、月輪の内側は鑿のような道具で丁寧に平坦に仕上げられている。具体的には、5号（赤5）に5個、11号（赤11）に3個、18号（赤15）に2個、19号（赤16）に2個、20号に（赤17）9個、23号（赤20）に1個、24号（赤21）に3個、78号（赤72）に3個である。尚、五輪塔の各輪に梵字を配したのものもあるが、それはこの梵字の項目には入っていない。20号（赤17）は、左壁の手前に梵字が見られるが、他は上下2段に配置されているのに対し、中央部に1個彫られている。また、劣化により入口附近の壁面が失われつつあるためか、

特殊施設の欄に「左壁の梵字に注意」と書かれている。状態の良いものと、下地の漆や金箔が残存している例もある。

表7からわかるように、最も多い浮彫りは五輪塔であった。これはさほど厚みを持たないものから、五輪塔が置かれているかのように見える立体的で丸みを持たせたものまで、その形態は様々である。地輪下部に納骨穴を持ったものもあれば、壇上に築いてあたかも壇に石塔を置いているようなものまである。41号（赤38）は、火輪を作りかけて終わりにしていたり、左壁は壁面の劣化により元の数がわからなくなっている。しかしながら、恐らくは現在確認されている10基に加え、あと3基あったと考えられ、このやぐら内に合計13基が彫られていた可能性がカードにも指摘されている。また、各やぐらに見られる浮彫りの五輪塔地輪は、台形をしているものが多いという傾向がある。

3-7. 壇の形成

やぐらの形状が方形を呈するものが殆どであることは、既に述べた通りである。そのやぐらの内部には、壇を形成しているものが見られたため、それらの内訳について表8に基数と壇をもつやぐら内の割合をまとめた。

表8. 壇の形成状況

	(基)	(%)
三方（奥壁・左壁・右壁）	51	65.4
二方（奥壁・左壁）	3	3.8
二方（奥壁・右壁）	1	1.3
二方（左壁・右壁）	2	2.6
一方（奥壁）	19	24.4
一方（左壁）	1	1.3

カードには「三方に棚」・「三方に切込み」と表現されたやぐらが5基ある。これらの目的は壇と同じであると考えたため、三方に壇を有するやぐらの項目に入れた。三方に壇を持つやぐらのうち、86号（赤80）・87号（赤81）・107号（赤101）・112号（赤106）・139号（赤128）・223号（赤-）は、奥壁にのみさらにもう1段、つまり壇が2段形成されている。27号（赤24）だけは、三方とも壇が2段設けられている。126号（赤-）は、奥壁のみ4段が階段状に設けられ、左右両側は高い位置に1段ずつ見られる。但し、この壇も近年では堆積物が増加し、最下壇が埋没しつつある。

次に多い形式は、奥壁にのみ壇を設けたやぐらで、19基（24.4%）が該当する。159号（赤148）だけは、左壁側にのみ壇が設けられている。二方に設けられた

やぐらは、合計6基（7.7%）である。155号（赤145）は、奥壁と左壁に壇が確認できるが、右側は現状では不明で、三方全てに壇を有する可能性、奥壁と左壁の二方の可能性のどちらも考えられるため、表8には入っていない。210号（赤-）は左右の奥壁に壇が存在し、それは地輪として使用されている。この155号（赤145）も併せると、合計78基に壇が設けられていることがわかり、これは全やぐら222基の35.1%にあたる。

3-8. 納骨穴について

3-7で述べた壇は、仏像を安置しただけでなく、石塔や骨蔵器を置くためのものであったと考えられる。その壇の上、或いはやぐら内の床面には、円形ないし方形の穴が掘られていることがある。これらは納骨するための穴である。納骨は、壁面の龕の中に行うこともあれば、五輪塔をはじめとする石塔の部材内部に窪みを設け、その中に納めることもある。納骨穴は45基で確認されており、これは全体の20.3%にあたる。カードの表記を参考に具体的な個数を数えたところ、少なくとも83穴、それに加え4基のやぐらには「数個」と書かれている。さらに、数は不明だが納骨穴の存在が確認されているやぐらは1基あるため、90穴以上が存在すると推察される。また、今回は明らかに納骨に関係すると記されていない用途不明の切込みについては除外した。これらの中には、納骨を目的としたものが含まれているかもしれない。それを加味すると、総数はさらに増加する。壇・納骨穴の存在から、やはりやぐらは納骨のための施設であったことが伺える。しかし、これらの備え付けの設備だけを利用したわけではなく、石塔に埋葬したり骨蔵器に納めたり、或いは散骨したと思われる例もある。

3-9. 灯明皿置場

納骨穴や龕の他に、灯明皿を置くために設けられたと考えられる小さな穴を持つやぐらがある。20号（赤17）・129号（赤-）・175号（赤-）の3基である。また、灯明皿も見つかっているが、これについては次の項目で触れる。

3-10. やぐら内の遺物

遺物については、表1の現存遺物の項目に示し、その内訳を表9にまとめた。やぐら内が大部分だが、一部やぐらの外に置かれているものも含まれている。やぐらの外に置かれた石塔は今も残されており、部材が埋没しかけているものもある。安田氏らによる調査時に確認されているこれらの遺物のうち、石塔類はやぐら内で場所が移動していたり、積み替えられていたり、別の場所へ移動したものもある。また、地震で倒壊した

ものなどもあるため、現在は写真と同様に位置していないことも多い。銘のあるものは、別地保存されていることもある。当時は堆積物の中に紛れて確認されていなかったが、その後何らかの影響で地表に姿を現し、現在見られる遺物もあるだろう。

表9. 遺物一覧

名称	材質	数
五輪塔空風輪	凝灰岩	137個
五輪塔火輪	凝灰岩	183個
五輪塔水輪	凝灰岩	143個
五輪塔地輪	凝灰岩	182個
五輪塔空風輪	安山岩	35個
五輪塔火輪	安山岩	28個
五輪塔水輪	安山岩	30個
五輪塔地輪	安山岩	28個
五輪塔空風輪	—	22個
五輪塔火輪	—	22個
五輪塔水輪	—	25個
五輪塔地輪	—	29個
五輪塔水輪	花崗岩	1個
五輪塔部材	凝灰岩	33個と数十
宝篋印塔基礎	安山岩	6個
宝篋印塔塔身	安山岩	5個
宝篋印塔傘	安山岩	7個
宝篋印塔相輪	安山岩	2個
宝塔塔身	凝灰岩	1個
写経石	—	多数
人骨	—	やぐら7基
灯明皿	—	2個と破片
弘法大師像	凝灰岩	80体
大師像台座	凝灰岩	3個
地藏菩薩像	凝灰岩・—	4体
薬師如来像	—	1体
その他仏像	—	1体と十三仏
標識柱	凝灰岩	1個
角柱宝珠形のもの	—	1個
屋根型石造物部材	凝灰岩	1個
碑	—	1個

凝灰岩製の五輪塔部材は、数が明確に記されている場合と、曖昧に書かれている場合があったため、カードの記述に基づき、詳細の不明瞭なものは表に入っていない。2号（赤2）には、安山岩と凝灰岩の五輪塔が25基あると書かれている。石塔の部材が他にも堆積物内に埋没していると推察されている例は、12号（赤12）・35号（赤32）・121号（赤114）・124号

（赤—）・136号（赤125）・160号（赤149）である。五輪塔の部材らしいが、何かわからないものが1個あると書かれているのは、135号（赤124）である。数十の凝灰岩製五輪塔部材の断欠は、143号（赤132）にある。156号（赤145の左側）も石塔の部材断欠が数個あると指摘されているが、こちらは五輪塔とは断定されていない。211号（赤—）においては、他にも石塔の部材がありそうだというような内容が書かれている。表9のように種類別に見ると、凝灰岩製五輪塔の部材は、645個であった。部材ごとの内訳は、凝灰岩製の空風輪が21.2%、火輪が28.4%、水輪が22.2%、地輪が28.2%で、部材ごとの大きな偏りは見られなかった。安山岩製の五輪塔部材は合計121個で、内訳は空風輪28.9%、火輪23.1%、水輪24.8%、地輪23.1%であった。五輪塔の中でも石質の不明な部材は合計98個あり、その内訳は空風輪22.4%、火輪22.4%、水輪25.5%、地輪29.6%である。以上、五輪塔の部材は865個に及び、各部材ごとに見ると、空風輪は194個、火輪は233個、水輪は199個、地輪は239個あった。これらに数が不確かな五輪塔部材、堆積物中にあると考えられるものを加えると、さらに総数は増大する。単純に各部材に分けただけでも、200基以上の五輪塔がやぐらに納められたことになる。

191号（赤—）の現存遺物の欄には、半分欠損した地輪の上下に納骨用の窪みがあることを指摘し、それは「資料として大切だと思われる」と資料の重要性についても言及している。もう1点、地輪について詳細な記載のあるやぐらがある。194号（赤—）の凝灰岩製の地輪に梵字の墨書きがあると書かれている。五輪塔の浮彫に梵字が残っている例は他にも見られるが、このやぐらに見られるものは、刷毛の痕が認められる見事な書体であると述べられている。筆者はこの石塔を未だ見たことがないため、是非現物を確認したいと考えている。

また、五輪塔の部材の中に、花崗岩製と思われる水輪1個の存在が記されている。鎌倉で花崗岩が使われることは無きに等しく、非常に貴重な例と考えられる。安田氏らの調査時には、既に水輪1個だけであったが、空風輪・火輪・地輪の部材も、花崗岩で作成されたものがあつた可能性も否定できない。

壁面の浮彫りと同様、五輪塔に比べ宝篋印塔は少ない。1964～65年当時、安山岩製しか発見されておらず、各部材の数はいずれも10個以下である。その他に宝塔らしきものの部材は1個見つかったが、板碑の存在については触れられていない。鎌倉各地のやぐらでは、板碑が納められている例も確認されているため、石塔の種類と埋納について検討する必要がある。

3-9で触れたように、やぐら内には灯明皿を置く場所が設けられている。遺物として灯明皿も確認されて

いるが、いずれも江戸時代のもので説明されている。現在、これらはやぐら内には見当たらない。多数あった写経石も現在は無い。碑と記したものの詳細は不明だが、これらは明治期のものらしい。同様に、やぐらが本来の目的として造営・使用されていた時代以降の遺物を現在も見ることができる。その例が仏像の類である。「仏像」という項目に分けたものは、覚園寺境内にあるやぐら内の十三仏と呼ばれるものが主で、明治期のものである。その他、「薬師像」1体も明治期のものである。地藏菩薩像は4体確認されている。その内1体は66号（赤60）で、カードでは室町期に追加されたものと推察している。最も多い明治期の像は弘法大師像で、合計80体ある。現在は頭部が欠損し、このような状況は安田氏らの調査時も同様である。但し、117号（赤111）の大師像2体だけは、写真の頭部が確認できる（図5a）。現在はこれも頭部が失われ（図5b）、他の大師像と同様の状態にある。一般的に、仏像の頭部だけが失われていると、廃仏毀釈との関連性が指摘されるが、この場合はそれとは関係ないらしい。明治年間に大半の頭部が欠損したといわれているが、少なくとも117号（赤111）に関しては、この約50年の間に頭部が欠損したということがわかる。



図5a. 1964年の弘法大師像



図5b. 2011年の弘法大師像

明治期に安置された弘法大師像は、当然のことながらやぐらが構築された当初とは関わりのないもので、やぐら群の中で山頂に近い列に見られる。弘法大師像の安置されているやぐら内に構築当時と思われる遺物が少ないのは、この像を納める時に別の場所に移動させてしまったからなのだろうか。また、カードには大師像の台座と書かれたものが3個ある。恐らく像自体は劣化して姿を失ったのだろう。現在、これらの弘法大師像の多くは劣化が激しく（図6）、劣悪な状態のものは自立することができずに床に横倒しに置かれている。



図6. 劣化した弘法大師像

先に述べたように、これらは明治期の納められたものであるため、約150年の期間に劣化したことがわかる。さらに、安田氏撮影の写真と比較すると、現在は一層劣化が進行している。傾向としては、羨道や両壁面の残るやぐら内に安置された像よりも、隣接するやぐらの側壁を失ったやぐら、つまり外部にさらされている所ほど劣化している。これについては、個々のやぐらを比較した論文で詳細を述べるため、そちらを参照していただきたい。

やぐらの最大の目的は、埋葬施設である。安田氏らの調査では、7基のやぐらに火葬した人骨・火葬していない人骨が確認されている。この中で着目すべきは、57号（赤51）である。このやぐらは凝灰岩製の五輪塔が納められており、その他に火葬していない人骨片が見つかったが、それは鋭利な刃物で切断した痕跡が明瞭に残っているというのである。被葬者に関する具体的な情報はなく、現在は見当たらないが、被葬者や葬送に関する貴重な記述である。

188号（赤ー）は、「以前、日野云々と記されていた木製角塔婆があった」という記述が見られる。安田氏らの調査時に、既にそこにはなくなっているのだろう。やぐらを使用していた当時は、仏像など木製のものが多くあったものと思われるが、扉用の木材も含め、現在木製遺物は皆無である。

211号（赤ー）には、計47個の石塔の部材が納められ

ている。それに加え、まだ地中にあると考えられているが、これらは附近のやぐらのものを集めてこの中に納めたと推察されている。このように、やぐらが構築されてから、使用されていた当時に徐々に納められたものもあれば、後世にどこのものかわからずひとまず納められたものなどがあり、その時代を特定するのは困難である。

3-11. やぐらの劣化に関する記述

このカードの特徴は、やぐらの劣化に関する記述が見られる点である。内部構造・特殊施設の欄を参考に、これらの記述を状況ごとにまとめたものが、表10である。

表10. 劣化状況

	(基)	(%)
埋没	28	12.6
天井崩落	10	4.5
崩壊	15	6.8
一部崩壊	4	1.8
風化	22	9.9
剥落	11	5.0
欠損	4	1.8
右壁欠損	9	4.1
左壁欠損	3	1.4
左右壁欠損	11	5.0
前半部欠損	13	5.9
樹木の根	1	0.5

表中の(%)は、やぐら群全体の222基に対する割合を示している。文言は様々であるが、カードには113基に関する壁面や天井の損傷が書かれている。実際、更に細かく見ればより多くの劣化が発生している。

23号(赤20)には、崩落の原因は電柱工事の際の不注意により起きたものであること、その対応としてコンクリートで天井を補ったということが記されている。崩落防止対策として、やぐら入口部分をコンクリートで補強しているやぐらは、鎌倉市内各地に見られる。

77号(赤71)は、風化の原因を山頂に近く海風を受けやすいからではないかと指摘している。確かにこのやぐら周辺は、隣接し合う壁面の劣化も著しい。しかしながら、附近は樹木もあり開けた場所でもないため、海からの風がどの程度影響しているか、現段階では判断しかねる。一方、109号(赤103)は、内面の仕上がりが極めて良好と書かれている。羨道の扉用の穴も完備されていることから、羨道があることで直接外部と接しておらず、内部が比較的安定した環境と推察される。

原型を留めていないやぐらの中には、後世の改変を受けたものがある。このような事例について述べられたやぐらは、以下の通りである。66号(赤60)の前室は、石切に使用されている。157号(赤-)は、構造がわからない程になってしまっているが、これは石切によるものである。また、198号(赤-)の上左側には、防空壕のような穴があると書かれている。やぐらの更に奥を掘り進めて防空壕とした例は他のやぐら群でも見られ、また大三輪龍彦氏は、幼い頃やぐらは防空壕であったと著書の中で述べている⁹⁾。覚園寺裏山やぐらには見られないが、現在倉庫や車庫として利用されている場所も多い。このように、後世に加工されることで、やぐら本来の姿が失われた場所も少なくないが、その地質がいかに加工しやすいものであるかがえる。また、218号(赤-)と223(赤-)は、以前住まいとしていた時期があるという記述が見られる。住まいとすることで、多少なりともやぐら自体に手が加えられている可能性も考えられる。

4. 「百八やぐら調査報告書」のもつ意義と活用

これまで発掘調査をはじめ、やぐらの形態分類、副葬品・石塔などからやぐらの研究は進められてきた。しかしながら、現在は姿を失ってしまったもの、後世に改変を受けたもの、所在地の知られていないものなどがあるため、いわゆる「やぐら」と呼ばれるものが果たして幾つあるのか、具体的な数さえ明確になっていない。近年、これまでの考古学的な調査の他に、保存科学の分野からやぐらの劣化のメカニズムなどの調査が行われたり、崩落防止対策を含め整備作業が進められている所もある。筆者自身も、文化財科学の立場からみたやぐらの劣化をテーマに研究に取り組んでいる。発掘調査報告書をはじめ、先達の研究成果は、やぐらを研究する上で重要な情報が残されているが、このカードの様にこれだけ多くのやぐらについて、同一の基準を持って同じ人が調査をし、詳細にまとめられた例は他に無い。また、このカードの特に貴重な点は、各やぐらに対する写真が貼ってあるということである。調査日が明確にされていること、併せて写真があるということは、まさにその日のやぐらの状況を知る重要な要素である。稀にやぐらの写真が残されているが、撮影日がわからないことが多い。さらに、附近を散策し、やぐらを訪れた記念撮影として、やぐらの中や前面の平場で撮った記念写真が残されていることもある。このような写真も、撮影当時の様子を知る貴重な資料である。しかしながらこのような場合は、無意識のうちに石塔や梵字の彫刻が施されていたり、壇が複雑に組まれているような比較的特長のあるやぐら、状態のいいやぐらを選んでしまうというのが人の心理だろう。

その点、この調査では全てのやぐらに対する写真が貼られているのである。B5サイズのカードにある写真は紙焼きされたもので、縦×横＝26×36mmと小さい。このネガを探したが、残念ながら現在は行方がわからなくなっている。カードの写真と現状を比較すると、この50年余りの間にも様々な変化が起きていることがわかる。そこで、現在筆者はこのカードの記載内容を基に、筆者自身が設定した劣化項目を照らし合わせ、現状の把握と記録保存に努めている。これについては、別途論じることとするため参照していただきたい。

5. まとめ

今回取り上げた覚園寺裏山やぐらに関する調査報告書（カード）は、安田三郎氏を中心に、大三輪龍彦氏・大森順雄氏により行われた詳細な調査がまとめられたものである。このカードの存在により、1964～1965年の状況を知ることができる。それと同時に、今後の研究への材料となる貴重な資料である。やぐらは、特に中世以降発展を遂げた鎌倉という地に残る痕跡であり、今も祖先の供養の場であることに変わりはない。構築から約700年以上の歳月が過ぎ、様々な劣化が生じているが、これらを後世に残すためにも、現状の把握と今後起きうる劣化について調査を進めることが必要と考えている。また、今回筆者が研究の参考としたように、50年後・100年後の将来も研究材料となることを期待している。

謝辞

今回の論文の執筆並びに調査に際し、覚園寺裏山やぐらのある覚園寺の仲田昌弘住職、仲田順昌副住職にご理解をいただき、本論文を執筆しました。また、『百八やぐら調査報告書』を所蔵する鎌倉市教育委員会に許可をいただきました。その際、鎌倉市教育委員会の米澤雅美氏のご協力を賜りました。今回、この報告書を基に研究を始めるにあたり、大三輪龍彦氏、大三輪邦子氏、古田土俊一氏の多大なるご協力の下、資料をまとめ公開する運びとなりました。過去の調査については、河野真知郎氏よりご教授を賜りました。ここに記し厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 河野真知郎『中世都市鎌倉―遺跡が語る武士の都―』講談社 2005年 174頁
- 2) 齊藤忠『日本史小百科 墳墓』近藤出版社 1978年
- 3) 『鎌倉市誌考古編』には、最大6段が形成されていると記されているが、これまでの筆者の調査によると最大で5段である。これについても再度現地調査で確認する。
- 4) 同様の形態のカードは、調査に携わった大三輪家にも所蔵されている。当初そのカードの存在を知り、この研究を始めたが、その後、鎌倉市教育委員会に報告書が所蔵されていることがわかった。両者を比較したところ、内容はほぼ同じだが、所々に相違が見られる。尚、大三輪家所蔵のカードは、178号・187～223号までのカードがない。
- 5) 今回資料としているカードと大三輪家所蔵のカードとでは、方位に相違の見られるやぐらが10箇所あるが、表3は鎌倉市教育委員会所蔵資料に基づいている。今後現地調査で確認したい。相違の見られるやぐらは次の表11の通りである。

表11. 主軸方向の相違点

やぐら名称	鎌倉市所蔵版	大三輪家所蔵版
10号（赤10）	N-80° -E	S-80° -W
11号（赤11）	N-70° -E	S-70° -W
17号（赤一）	N-22° -W	S-22° -E
18号（赤15）	N-20° -W	S-20° -E
18号（赤15）	N-25° -W	記載なし
31号（赤28）	N-25° -W	S-35° -W
37号（赤34）	N	S
40号（赤37）	N	S
69号（赤63）	N-32° -E	記載なし
118号（赤112）	N-30° -E	N-30° -W

- 6) 大三輪龍彦『鎌倉のやぐら―もののふの浄土―』（鎌倉春秋社 1975年 8頁

参考文献

- ・星野玲子『鎌倉の「やぐら」に関する研究―やぐらの劣化と保存―』2010年 博士論文
- ・鎌倉市教育委員会『史跡覚園寺境内保存管理計画書』2007年
- ・鎌倉市誌編集委員会『鎌倉市誌 考古編』吉川弘文館 1959年